
IS ～難攻不落の要塞～

元号四年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 〜難攻不落の要塞〜

【Nコード】

N6806T

【作者名】

元号四年

【あらすじ】

レイソニア・A・ファルクフェルト。オーストリアの国家代表IS操縦者であり、世界でISを操る男子の二人目。世界最高峰の技術力を持ち、それは篠ノ之束の技術力をも軽く凌駕する。オーストリアの王位継承権第一位の第一王子である傍ら、自らが自作した第五世代型IS、難攻不落の要塞を駆る彼の、本当の目的は――。主人公は基本的に飄々とした性格とクールな性格が同居している少し変わったタイプの人間です。そして基本的に変態です。今主人公のフラグはシャルロットとラウラに立っています。興味があったら

読んでみてください。

ブローグ

『ターゲット、オールクリアー。訓練を終了します』

「ふう……」

今日の訓練も無事に終了し、俺は安堵の溜息をついた。

眼前に広がるのは空の無い、隔離された空間。それが、俺のためだけに作られた自由の一切無い真っ暗な鳥かごだ。

俺がここでこうしているのには理由がある。それは、俺と同時期に世界に出現した、「世界で唯一ISを動かせる男子」である織斑一夏のせいだ。

この「唯一」という称号のせいで、俺はしばらくの間明るみに出れなくなったのだ。まあ、今となってはそこまで気にはしていないし、普通に過ごしていたら考えられないほどの経験を積む事も出来た。なんて言っても、ISを動かせるようになって一ヶ月で稼働時間が三百時間を越えたし。

それはともかく。

こんな穴倉の中で身を潜める生活も今日で終わる。なぜなら、俺は明日から日本のIS学園というところに通うことになっているからだ。

（ようやく会えるな）

俺は首に巻かれるようになっている待機状態の専用機、「要塞」フォートレスを指で撫でる。

その感触を確かめながら、俺は自分の部屋で荷造りをするべく早速で廊下を駆けた。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！　しかも三名です！」

「『えええええっ！？』」

教室の中がやけに騒がしくなるが、それもそのはず。普通の学校だったら転校生が多く来たとしたらまず間違いなく分散するし、そもそも転校生が三人なんてイレギュラーにもほどがあるだろう。

教室の中で織斑先生が「入れ」と視線で言ってくる。俺を含めた転校生三人は開いたままのドアから入って行き、中の女子（一人男）の視線を集めることになった。

しかし、ここで誤算があった。予定では俺が「世界でISを使える二人目の男子」というものになる予定だったのに、転校生にもう一人男が混じっていたのだ。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

デュノアと名乗った男は、かなり女っぽい顔つきと体型をしていた。女装してたら絶対に気付かないようなレベルの。

ただ、俺はこの時点で誰も気付いていないであろう事に気付いていた。

自慢じゃないが（自慢にもならないが）、俺には一つの特異能力

がある。ワンオフ・アビリティーの類ではないが、男なら誰でも欲しがる究極の目、『Yの魔眼』というものだ。

これを使うと、たとえどれだけ分厚い服を着てようと3サイズが完璧に分かるというものだ（女子限定）。詳しい話は割愛するが、俺の目に映った女は丸裸になったも同然なのだ（例えね。本当にそうだったとしたら俺は本物の変態だよ）。

で、俺の目に映ったシャルルには、その3サイズが完全に見えていた。この場で言うつもりは無いから黙っておくけど、そのうちなんで男装してるのか聞いてみようと思う。

「次は俺か」

女子一同物凄く騒ぎたいようだが、教室の前のほうで織斑先生が睨んでるから下手に動けないんだろう。事前に聞いた話だと、問答無用で出席簿を振り下ろすという恐ろしい一面を持ち合わせてるらしいし。

「レイソニア・A・ファルクフェルトだ。出身はオーストリア。この国に来る上で一番面倒だったのは日本語を覚えることだった。名前が長いから、気軽にレイスと呼んでほしい。以上」

俺は簡単に自己紹介を済ませて残ったもう一人のために場所を譲る。だが、もう一人の女子は腕を組んだまま動こうとしない。

（なんだこいつ？ 寝てんのか？）

俺の第一印象はそれだった。どこか無愛想で誰も寄せ付けないような雰囲気はあるものの、全くとっていいほど威圧感を感じない。

格好はまるで軍人のようだが、俺はそれ以外にも思ったことがあった。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

やっぱりか、と思った。

風の噂で聞いたことがある。第一回モンド・グロッソで見事に優勝を果たしたものの、第二回大会ではまさかの不戦敗で二連続優勝を逃したのが俺の目の前にいる織斑先生で、その織斑先生が一時期ドイツのハーゼ隊で教鞭を振るっていた時期があると。

そしてこの女子が、織斑先生がハーゼ隊で一番気にかけていたという――

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「「「……………」」」

教室がしんと静まり返る。だが、ラウラがその続きを話し出す気配は無い。

（それよりも、こいつが織斑先生の弟の織斑一夏を見たら……）

「！ 貴様が――」

だと思ったよ。

ラウラは一夏のそばまで歩いて行くと――

バシンッ！

という小気味いい音を立てて一夏の顔が左に向いた。ああ、予想通りの展開過ぎてなんか嫌だ……。

「私は認めない」

一夏は少しの間ボーっとしていたが、ようやく頬の痛みに気付いたのかラウラをキッと睨んだ。

だが、ラウラはそんなものを気にする様子も無い。

「貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

それだけ言い残すと、ラウラは後ろの開いている席に座って微動だにしなくなった。

完全に蚊帳の外になった俺とデュノア。お互いに視線を交わし、俺は一つ溜息を、デュノアは苦々しげに笑った。

「あー……ゴホンゴホン！ ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

織斑先生が手を叩いて行動を促す。

「おい織斑。デュノアとレイスの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」
どうでもいいけど織斑先生って学校だと一夏のこと「織斑」って呼ぶのか。公私混同しない辺りは流石だと思うけど。

「君が織斑君？ 初めまして。僕は――」

「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから
そう言った一夏はデュノアの手を掴んで教室から連れ出そうとする。賢明な判断だ。その行動が変なフラグを立てなければ百点だったんだけど。

ちなみに、俺は織斑先生が「第二グラウンドでIS模擬戦闘――」
と言った辺りにはすでに準備が完了していた。だが、俺はあまり急ぐ必要が無い。

何故か？ 俺が常にISスーツを着てるから。

いざというときにいちいち着替えてる時間が惜しいから、常にISスーツを着るようにしてたらいつの間にかこれが習慣になっていた。

まあ、これからはちゃんとしたところで着替えなないといけないだろうから、俺は急いで歩き出した一夏とデュノアの後を追った。

「とりあえず男子は空いてるアリーナで着替え。これから実習のたびにこの移動だから、早めに慣れてくれ」

「う、うん……」

あーあ、早速変なフラグ立っちゃったよ。俺しーらね。

ただ、その後で一夏が俺でも予想外のセリフを口にした。

「トイレか？」

うおいつ！？　いくらなんでもそれは無いだろ！　俺でも言わねえぞそんなこと！

「トイ……っ違うよ！」

「そうか。それは何より」

これだけのやり取りで俺は気付いた。

こいつ……究極のキング・オブ・唐変木だ……。

迫り来る女子の集団から何とか逃げ切り（一夏を囷にして）、俺とデュノア、一夏は第二アリーナの更衣室まで来ていた。

「うわ！ 時間ヤバイな！ さっさと着替えちまおうぜ」

一夏が時計を見るのと同時に俺の視線も時計へと向く。授業が始まるまであと五分。結構微妙な時間だ。

一夏は時間を確認し終わると同時に一息で上着を脱ぎ捨ててベンチに放ると、デュノアが「わあっ！」と叫んだ。あ、そうか。こいつ女子だったつけ。

「荷物でも忘れたのか？ って、何で着替えないんだ？ 早く着替えないと遅れるぞ。シャルルは知らないかもしれないが、うちの担任はそりゃあ時間にうるさい人で――」

「う、うんっ？ き、着替えるよ？ でも、その、あっち向いてて……ね？」

俺は言われずとも視線を逸らしていたが、一夏はそれを疑問に思ったような視線でデュノアを見つめていた。

「???? いやまあ、別に着替えをジロジロ見る気は無いが……」
「一夏、こいつにもいろいろあるんだよ」

俺は一夏の側にそっと寄り、「デュノアには大きな傷があって、それを見られたくないんだよ」
と嘘情報を吹き込んでおいた。一夏は「何でお前がそんな事知って

るんだ？」的な視線を投げかけてきたが、それは華麗にスルー。

「そんなことより早く着替えなくていいのか？」

「え？ …… おわっ！ もうこんな時間じゃねえか！」

ようやく自体を認識した一夏が頓狂な声をあげる。若干弄るのが楽しくなってきたかもしれない。

一夏がISスーツ相手に悪戦苦闘してるのを見て、なんとなく微笑みさを感じていると、デュノアはそんな俺たちを尻目に超高速で着替えを済ませていた。

「よっ、と。——よし、行こうぜ」

「う、うん」

「ああ」

俺は最初からISスーツを着ていたため、制服を脱ぐのと殆ど同時に一夏の着替えも終わり、結果的には三人が殆ど同時に着替え終わったような感じになっていた。

「遅い！」

第二グラウンドに着いた俺たちを待っていたのは、織斑先生の厳しいお叱りの言葉だった。たしかに、俺達以外の女子は全員整列が終わっていて、遅れているのは俺たちだけという状況だ。

ふと一夏のほうを見ると、何かをブツブツと呟きながら微かに笑っていた。何を考えたらこんなバカみたいな顔ができるんだろうか。

「くだらんことを考えている暇があったらさっさと列に並べ！」

織斑先生は一夏をそう一喝すると、手に持っていた出席簿の面のほうで思い切りひっぱっていた。いい音だ。

とは言え、このままここにいたら俺たちも出席簿を食らうのは目に見えているから即座に席に並ぶ。俺のファミリーネームはファルクフェルトだから、出席番号は26番。真ん中よりも少し後ろの方で、丁度後ろにボーデヴィツヒがいる（ボーデヴィツヒは27番。教室での席も俺の後ろだ）。

というか、無言の視線がやたら怖い。俺に向けられているわけではないと分かつてはいるが、俺の左前方にいる一夏はそんな視線など気にする様子も無く隣にいる——確かイギリスの代表候補生、セシリア・オルコットと話しこんでいる。

（もしかしてあいつって、天然で女子を誑しこむタイプなのか？）

そんなことを考えていると、一夏に向かって三つの視線に氣付いた。一人はオルコット、一人は一夏の後ろにいるツインテールの女子（ここからだと言えない）、もう一人は少し離れたところに立っている胸のどかいポニーテールの女子だ。

（へえ……フラグビンビンじゃなか……）

この国では自慢にはならないかもしれないが、俺は一種のオタクというやつだ。俺の故郷であるオーストリアでも、日本におけるオタクというものは一種の名誉称号であり、その称号を堂々と語れるのは一種の勇者だ。

だからどうってわけじゃないんだが。

「はあ！？　一夏！　アンタなんでそうバカなの！？」

いきなり一夏の後ろにいた女子が喚き出した。それと同時に、その女子の後ろに立っていた女子が一步身を引き、開いたスペースに織斑先生が入り込んだ。

そして一言。

「——安心しろ。バカは私の目の前にも二名いる」

その瞬間、間接部分の錆びた人形のように振り返った女子二名が織斑先生の出席簿アタックを快活な音とともに頭の天辺に叩きつけられていた。

「ちょっと！ あたしのこと忘れてない！？」

そう言いながら出てきたのは、さっき織斑先生に叩かれていたツインテールの女子。どこかで見た事あるような顔だけど、まさかこの子も代表候補生なのか？

……。……。……。あ。

そうだ思い出した。中国の代表候補生の鳳とか言う女子だったな。中国とか興味ないからすっかり忘れてた。

「じゃあお前が俺の相手してくれるのか？ 俺的には1対5でも全然構わないんだけど」

「それってあたしに喧嘩売ってんの！？」

「いや、1対1だと30秒で終わるから……」

正直な気持ちこれが。モンド・グロツソに出場する選手クラスの実力か、現ロシア代表の更識楯無クラスの実力があるなら話は別だけど……。

そう言えば更識ってこの学園の生徒会長だったな……。今度会いに行ってみるか……。

「慌てるなバカども。対戦相手は——」

そこまで言った織斑先生の顔が、突然上に向いた。なにかと思つて俺も同じように空を見上げると、丁度謎の飛行物体Xが落下してくるところだった。

——一夏の頭上に。

それを認識したのと、俺がISを部分展開してAICを発動したのは殆ど同時だった。

AIC。Active Inercial Cancellorの略。要は慣性停止結界だが、これが搭載されているのは第三世代型IS以降の機体のみで、俺のは既に完成したものだ。

空間圧作用を利用した一種の兵器だが、これ単体だと特に戦いには役に立たない。

だが、対象の動きを止めるという一点に関してはこれほどまでに有用かつ便利な能力も存在しないのが事実だ。現に、一夏の頭上に落下してきた謎の飛行物体Xは一夏の頭上数メートルのところで完全に停止している。

俺がAICを解くのと同時に空中に浮きっぱなしになっていた謎の飛行物体X——面倒くさいから山田先生——は、ドスンッという音とともに落ちた。

……まさかとは思うが、俺の対戦相手つてもしかして……。

俺の嫌な予感ほどよく当たるものは無い。やっぱり、俺の予想通り対戦相手は山田先生だった。

「では、はじめー」

号令とともに俺は刃渡り2・3メートルの巨大な剣、《オベリオン》を展開して山田先生に向けて構える。俺は基本的に遠・中・近距離まで全ての間合いに対応できるが、それでもやっぱり近距離系のほうが気分が楽だ。

「そんじゃ、ま」

俺はさらに大型の盾、《ドラゴン・スケイル龍の鱗》を展開する。これだけのサイズだと片手で扱うのはかなり至難の業だが、慣れてしまったためそこまで苦労はしない。

「行きますよ！」

俺は《イグニッション・ブースト瞬間加速》を使って一気に山田先生との距離を詰める。が、山田先生は手に構えた銃をこっちに向けたまま後方へと下がり、続けざまにセミオートにした銃の銃口から四発の弾丸が俺に向けて一直線に飛んできた。

けど、無駄。

「っ!?!」

山田先生は俺を見たまま驚愕の表情を浮かべる。まあ、それも当然のこと。だって、当たると思って撃った弾丸が俺の体をすり抜けてんだから。

これが俺の要塞の唯一仕様能力。ロンオフ・アビリティーその名も、アンチ・マテリアル非物質化。

要するに自分の機体を体ごと非物質化する能力だ。もちろん時間制限はあるし、一度の戦闘では三回以上使えない。

けど、ほんの一瞬の隙さえあればそれだけで十分。

山田先生は俺に向かってオートで弾丸を連射する。けど、俺が一瞬にして展開した追加装甲、《紅の砲台》、《蒼の城門》、《白の外壁》、《黒の側溝》の四つの前には意味を成さない。

一応弾丸によってシールドエネルギーは削られるものの、それでも1、2程度の微々たるもので致命傷にはなりえない。

そして俺の要塞に取り付けられた《紅の砲台》が火を噴き、一瞬にして勝敗は決した。

「……どういうことだ」

「ん？」

昼休み。俺たちは屋上にいた。

なぜかって言うと、俺は当初食堂で昼食を食べる予定だったのだが、デュノアと一緒に一夏に「屋上で食おうぜ」と誘われ、購買でパンを購入、現在に至るというわけだ。

だが、本気で人を殺せるぐらいの殺気を放っている女子——たしか、篠ノ之とか言ったつけ——が一夏をガン睨みしているため、若干空気が重い。しかも、一夏はその事に気付いてない感じだからタチの悪い事この上ない。

「天気がいいから屋上で食べるって話だっただろ？」

「そうではなくてだな……！」

篠ノ之がちらりと俺たちのほうを見る。現在ここにいるのは俺とデュノア、オルコットに鳳の六人。何も知らない人間が見たらフィーリング・カップルが出来る人数だが、実際は女子が四人の男子が二人。この事に気付いてるのは俺だけだ。

「折角の昼飯だし、大勢で食った方が美味いだろ？ それに、シャルルとレイスは転校してきたばっかで右も左も分からないだろうし」「そ、それはそうだが……」

ちよつと待て、異議ありだ。デュノアがどうかは知らないけど、

俺は空間把握能力に長けてるから学園内の構図は全部頭の中に入ってる。少なくとも右も左も分らないという事は無いぞ。

どうやらデユノアも同じ気持ちのようで、「あはは……」と苦笑いしている。何でもいいけど、一夏って初対面の奴見縊りすぎじゃないだろうか。

俺は購買で買ったメロンパンとカレーパン、チョココロネにクリームパンにこしあんパンと牛乳1リットルを袋から引っ張り出して自分の目の前に並べる。それを見た鳳とデユノアが「うわぁ……」と声を漏らしたが、気にしない。育ち盛りの男子だったらこのくらいは普通に食う。

「はい一夏、アンタの分」

鳳はそう言うのと、一夏のほうにタッパーを投げていた。どうでもいいけど、食物を投げるという行為には俺は些いさか疑問を抱くんだが……。

「おお、酢豚だ！」

「そ。今朝作ったのよ。あんた前に食べたいって言ってたでしょ」

酢豚か……そう言えば、以前日本に来たとき以来食ってないな……。

「コホンコホン。——一夏さん、わたくしも今朝はたまたま偶然何かの因果が早く目が覚めまして、こういうものを用意してみました。よろしければおひとつどうぞ」

そう言ってバスケットを開くオルコット。その中には色彩豊かな

サンドイッチが所狭しと並べられていた。

なかなか美味そうに見えるんだが、一夏が若干引き気味になっているのはどういいう見なんだ？ しかも鳳は「うわぁ……」と言いたげな顔で一夏を見ていた。

……？ 一体何が？

「オルコット、俺も一つ貰っていいか？」
「ええどうぞ」

オルコットはそう言いながら俺のほうにバスケットを差し出してきた。俺はそこからハムとレタスが挟まったものをチョイスし、口に放り込む。

……いたって普通のサンドイッチだ。そもそも、ハムとレタスをパンに挟むだけなんだから、とてつもないぐらいの——バカテスの姫路クラスの料理の腕でも無い限りハムとレタスの間に挟まった何かの物体Xが俺の舌を刺激するような状態にはとてもじゃないがなりえないはずでくばはっ！

「！ おいレイス！ しっかりしろ！」

遠くで誰かが俺の名前を呼ぶ声がする。……あ、お花畑だ。その向こうには大きな川まで見える。しかも、先祖の爺さんや婆さんたちが手を振っている。

待っててくれよ、もう少しでそっちに行くから——

「うおわっ！」

あ、危なかった。もう少しで向こうの世界に旅立つところだった。
ぎりぎりセーフ。

「レイス、大丈夫？」

そんなことを考えていると、デュノアが俺を心配そうに覗き込んできた。
……………。

（やっぱり女だよなあ……………）
「？」

俺の心の声は外には漏れなかったらしく、デュノアは小動物的な
仕草で首を傾げるだけだった。

「で、結局俺はデュノアと同室なわけか……」

一日の授業も終わり、俺とデュノアは揃って1026号室（一夏の部屋の隣）へとやってきていた。

この寮の部屋は例外なく二人部屋なのだが、一夏のルームメイトは少し前に出てっつたらしい。喧嘩別れかとも思ったがそうでもなかったらしい。

「よろしくね、レイス」

「ん、ああ」

につこりと微笑んでくるデュノア。うーん、やっぱりなんで男装してるのか聞くべきか聞かざるべきか……。

まあ、仮に何かの目的があつて男装してるんだとしたら、その理由はすでに分かつてるんだけど。あえて言う必要も無いから言わない。

「紅茶でも飲むか？ アッサムとダージリンとアールグレイ、どれがいい？」

「あ、じゃあアッサムで」

俺は自分の荷物の中から紅茶の茶葉が入った瓶を取り出し、ちょっとした理由で鍛え上げた腕で完璧な紅茶を淹れる。茶葉が持つ独特な香りがカップから立ち上り、時差とかであまり落ち着かなかった俺の心を優しく静めていく。

……うん。今日も完璧。

落ち着いているのはデュノアも同じなようで（何度かシャルルと呼ぼうとしたが、なんか発音の関係でデュノアのほうが言いやすいからこつちを採用した）、「ほう……」と熱っぽい溜息を漏らしていた。

本当だったらここにお菓子とかあれば最高なんだけど、そろそろ夕食の時間だから自重。日本食に憧れる外人の気持ちを分かっている。

「この紅茶美味しいね。レイスの国のものなの？」

「いや、これはイギリスから直接取り寄せたんだ。あっちの方が品質はいいし、色々と安心できるからな」

まあ、俺の腕ならどんなに安物の茶葉でも高級店で出される一流の紅茶に劣らない味を出せるけど。極端な話、スーパーに売ってる水出しのものでも。

「それにしても、レイスのISって凄いね。武装の追加だけじゃなくて、装甲の追加まで出来るんだもん」

「ああ、あれか……」

「あれってどういう仕組みなの？」

うーん……説明するの面倒なんだよな……。

「とりあえず、俺のIS、《要塞》は第五世代型と殆ど同性能だと思っただけだよ。大体それで合ってるから」

第五世代型の特性は《追加展開装甲》。オーストリアでは既に開発された（一般には公開していないが）第四世代型ISで使われた《展開装甲》をさらに進化させ、後付武装を改良し、後付装甲にしたものが現在オーストリアで使われている第五世代型ISなのだ。

因みに、この事はオーストリアでもIS関係者のトップクラスの人間しか知らない。

だから、当然のようにデュノアの反応は――

「ええええええっ！？ 第五世代！？」

こうなる。

俺の想像が正しければ、デュノアが男装している理由は恐らく、一夏のIS、白式のデータを盗んで来いというものはずだ。世界でISを使える男子という触れ込みは間違いなく話題になるし、同じようにISを使える男子である一夏に接触する事も容易くなるはずだ。

だが、一夏のISのスペックは確かに高いが（零落白夜は第四世代型の武装と同性能）、それよりも近くに完成した第五世代型ISがあるとなれば狙いはこっちに向くはず。

（問題はこいつが本当の工作員なのかって話だけど……）

スパイにしては隙が多すぎるし、工作員にしては行動原理がかなり希薄だ。パツと見は普通の高校生。逆に疑う方が難しいんだけど……。

「なあデュノア、一つ聞いてもいいか？」

「え？ 何？」

「何でお前男装してんの？」

そう聞いた途端、デュノアの表情が強張った。だがそれも一瞬で元の表情に戻り、「な、何のことかな……？」と聞き返してきた。

けどその反応は素直に認めてるようなものだぞ。

「少し考えれば分かる事だ。更衣室での着替え、トイレに行く時の一々挙動不審な行動とかだな。幸いあの唐変木は気付いてないみたいだし、他の連中も気付いてないみたいだけど俺の目は誤魔化せないぞ」

「あ、あはは……レイスって冗談が得意なんだね」

「79、57、78」

俺がそう言うと、デュノアはハツとした表情で俺を見た。けど、それも当然の反応だ。なんてったって、デュノアの3サイズなんだから。

「完璧に女の体型だ。男だったらどんなに痩せててもウエストは75以上ある。これは骨格の問題だ」

一般的に男性の骨格は肋骨が上から下まで同じ位置にある。だが、女性は下に行くほど肋骨が狭まる傾向にあり、それがくびれを生む。

つまり、くびれが出来るような体型をしているデュノアは間違いなく女だということだ。

「別に理由があるなら無理に聞こうとは思わないし、他の連中には

らす気もないけど——」

紅茶を飲みながらそこまで言いかけて、俺はデュノアの不審な動きに気が付いた。

何をしてるかって言うと……

「ぶっ！」

思わず紅茶を吹き出すような光景がそこにはあった。

デュノアが、脱いでいた。

「おっ、おまつ、何してんの!？」

「だって、こうでもしないとレイスは信じてくれそうに無いから…

…」

床に落ちる男子用の制服。そしてデュノアは一糸纏わぬ姿になり、俺にその素肌を晒した。

「ほら、ちゃんと見て……」

「見ない! 俺は見えてないからさっさと服を着ろ!」

俺っていつもこんなんだから誤解されがちだけど、これでも十五歳の男子だぞ! 女性の裸を見るのになんて慣れてるわけ無いだろ!

そんな風に必死に見ないように頑張っていると、俺の体に何かが触れる感触が。思わず目を開けると、ベッドに座った俺をデュノア

が押し倒しているシーンだった。

まずい。このままだと中学の時の友人が貸してくれたあのビデオの内容と同じような状況に――

「レイス……」

やめろ！ そんな甘ったるい声で俺に寄りかかって来るな！ 理性の檻に閉じ込められた魔物が現世に召喚されちゃうから！ 俺の欲望が理性という名の監獄をプリズン・ブレイクしようとしてるから！

「僕を見て……」

なんかふよふよした感触が俺の胸に当たって、さらに俺の太腿になんか肉感的な物体が――肉感的な物体？

バツと顔を上げデュノアを直視する。顔は間違いなく女の造形。殆どまっ平らな胸のさらに下の方には、かなり見慣れた物体が。

そう。風呂に入る時いつも見ているあれが――

「……え？」

「僕は……男だよ……」

そう言いながらキスしてくるデュノア。え、何これ。どういう状況？ デュノアは女で、いや男で、アレが付いてて、今現在俺を抱きしめていて、不覚にも俺は若干興奮し始めて……え？

「レイスが悪いんだよ……僕の心をこんなにも掻き乱して……」

ちょ、待った、タンマだ。俺はそんな趣味は無い。普通に女子が好きで男子とこんな関係になるのなんてまっぴら御免でもこんなに可愛い男子だったらそういうのになってもいいかなんて考えてる自分が居始めたりして――

「レイス……好き……」

――俺とデュノアは、一線を越えた。

「ってなんじゃこりゃ!!??」

大声を上げながら飛び上がると、そこはベッドの上だった。

「大丈夫？ レイス」

声のした方へ顔を向けると、デュノアが普通に制服を着て立っていた。

状況確認。ここは俺たちの部屋（荷物があるから間違いない）。部屋に備え付けられた二つのテーブルの上には紅茶の入ったカップが二つ、ソーサーの上に乗っている。

「デュノア、俺って一体どうしたんだ？」

「え？ 紅茶を飲んでたらいきなり頭がぐらぐらし始めて、いきなり倒れて眠り始めたからベッドに寝かせておいたんだけど……」

……ってことは、あれは全部夢？

「ふう……」

よかった。アレが事実だったら俺はもう二度と立ち直れないレベルの傷を心に背負っていたはずだ。まあ、ちよつと情けない姿を晒したみたいだけだ。

俺の体は少し変な特徴があつて（というか体質）、疲れが溜まっている時に紅茶を飲むと物凄い眠気が襲ってきて、その数秒後には昏倒するという恐ろしい体質を抱えているのだ。

まあ裏を返せば、滅茶苦茶疲れていて早く寝たい時は紅茶を飲めばすぐに眠れるって言う事なんだけど。

「そういえばどこまで話したっけ？」

「レイスのISが第五世代型っていうところまで」

なるほど、その辺りから俺の記憶が吹っ飛んでるのか。逆に、そこから吹っ飛んでくれて良かったかもしれない。あんな目にあうのは二度と御免だ。

「そろそろ食堂に行こ？　早くしないと閉まっちゃうだろうし」

「ああ、そうだな」

昼食は一夏に誘われて、オルコットの作った殺人料理で一撃ノックアウトされてから食欲が失せたため、現在俺はかなり空きっ腹だ。早く日本料理に舌鼓を打ちたい。

その後、俺とデュノアが食堂で多数の女子に質問攻めに合ったのは別の話。多分語る機会も無いと思う。

「あのな、お前が鳳やオルコットに勝てないのは単純に射撃武器の特性を理解して無いからだ」

「そ、そうなのか？ 一応分かっているつもりだったんだが……」

俺とデュノア、ボーデヴィツヒがIS学園に編入してから5日後の土曜日。土曜日は午前中が理論学習、午後は完全に自由時間らしく、俺たちを含めた多数の生徒がアリーナを使用している。今日はデュノアと一夏で軽く手合わせをした後、一夏に遠距離射撃武器に関する事をレクチャーしていた。

「うーん、知識として知っているだけって感じかな。さつき僕と戦った時も殆ど間合いを詰められてなかったよね？」

「うっ……、確かに。『イグニッション・ブースト 瞬時加速』も読まれてたしな……」

ちなみに、一夏は俺とやったときは30秒で勝負がついた。動きはなかなか早かったけど、追加展開装甲を装着した状態の要塞と^{フォートレス}じや一切間合いを詰められず、俺の中距離武器であるフレア弾（ホーミング性能が超高い）と《紅の砲台》、《白の外壁》に装備された9.63mmマシンガン28門によって為す術もなかった。

「お前のISは近接戦オンリーなんだから、普通にやるよりも考えて戦わないといけないんだよ。特にお前の瞬時加速なんて直線的で読みやすい上に遠くから牽制してれば簡単に追い込む事が出来んだからな」

「むう……直線的って言われてもな……」

「あ、でも瞬時加速中はあんまり無理に軌道変えたりしないほうがいいよ。空気抵抗とか圧力の関係で機体に負荷がかかると、最悪の

場合骨折したりするからね」

「……なるほど」

一夏は俺とデュノアの言葉を真剣に聞いている。なかなか勤勉なところもあるものだと思った、まる。

しかし、ここに来た時に俺とデュノアは速効で理解した事がある。それは、こいつの周りにはまともな感性を持って指導できる人間が少なすぎるという状況だ。なにせ、さっきまで一夏に教えていた篠ノ之たちの話の内容が、

『こう、ずばーっとやってから、がきんっ！ どかんっ！ という感じだ』

『なんとなく分かるでしょ？ 感覚よ感覚。……はあ？ なんでわかんないのよバカ』

『防御の時は右半身を斜め上前方へ五度傾けて、回避の時は後方へ二十度反転ですわ』

これだった。流石に同情せざるを得なかったね。特に篠ノ之。意味不明すぎて何を言ってるのか全く分からなかった。

鳳^{ファン}は鳳で言ってる事が滅茶苦茶だし、オルコットは言ってる事が妙に理論的で逆に分かりづらい。

「ふん。私のアドバイスをちゃんと聞かないからだ」

「あんなにわかりやすく教えてやったのに、なによ」

「わたくしの理路整然とした説明の何が不満だというのかしら」

「いや、正直不満しかなかったと思うぞ」

俺が一夏の立場だったら間違いないくキレてるね。一夏もキレてい

いところだと思う。

「一夏の白式イコリイザって後付武装が無いんだよね？」

「ああ。何度か調べてもらったんだけど拡張領域バス・スロットが空いて無いらしい。だから量子変換インストールは無理だって言われた」

「それって零落白夜に容量使いすぎてるからだろ？ ま、お前じゃ拡張領域がどんなに空いててどんな射撃武器を量子変換しても、結局まともに戦えるようになるとは到底思えないけどな」

「ぐっ……」

図星なのか一夏は何も言い返してこない。そう言えば、三日ぐらい前に一夏が織斑先生と何かを話してるシーンを目撃したな。負けず嫌いのこいつが何もいい返してこない辺り、織斑先生にも同様のことを言われたっばい。

「ま、習うより慣れろってやつだ。デュノア、なんか手ごろな射撃武器貸してやれよ」

「え？ 他のやつアン・ロックの装備って使えないんじゃないのか？」

「普通はね。でも使用者が使用許諾すれば、登録してある人全員が使えるんだよ。——うん。今一夏と白式に使用許諾を発行したから、試しに撃ってみて」

そう言いながらデュノアは54口径のアサルトライフル、《テンペスト》を一夏に手渡す。速射性がかなり高く、反動も少ないからISの武器としてはかなり扱いやすい部類に入る射撃武器だ。まあ、生身で撃つたらまず間違はなく肩の骨脱臼するけど。

「か、構えはこれでいいのか？」

「もっと脇締めて、左手はもうちょい上。……そう、その辺」

初めて射撃武器を扱うのか、一夏の動作はやけにぎこちない。まあ、銃社会じゃない日本で銃火器に触れる事自体が少ないか。

ちなみに、俺が一夏に射撃武器を貸さなかったのには理由がある。俺の遠距離武器は例外なく超大口径の実弾銃であるため、反動が物凄く、慣れていない人間が使うとISの補正とかを上回るほどの大きな反動で機体に損害が及ぶ危険性があるからだ。

ついでに、山田先生との実践の時に使った《紅の砲台》は驚異の124口径。一撃でシールドエネルギーを500近く削るといっ破^{モン}碎兵器だ。
スターウエボン

「それ終わったら後でまた演習するからな。じゃ、俺ちよつとトイレ行つてくつから」

さっきから一夏のへっぽこつぷりが酷くて行くに行けなかったんだよな。さっさと行つて済ませて来よつと。

戻った時にはアリーナの状況が一変していた。銀髪緋眼の眼帯少女、ラウラ・ボーデヴィツヒが一夏をガン睨みしていた。

また厄介な事になりそうだなと考えていると、ISの解放回線^{オープン・チャンネル}からボーデヴィツヒの声が聞こえてきた。

『貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしえただろうことは容易に想像できる。だから私は貴様を——貴様の存在を認めない』

一夏嫌われてんなあ。まあ、言ってる事は理解できるけど。

このまま放っておくと面倒な事になりそうだし、俺も向こう行きますか。

『また今度な』

『ふん。ならば――戦わざるを得ない状況にしてやる！』

そう怒鳴ると、ボーデヴィツヒのISが戦闘状態へと移行し肩に装備された実弾砲が火を吹いた。

けど、ギリギリ間に合ったみたいだ。

「！」

ボーデヴィツヒの撃った弾は俺の要塞の追加展開装甲、《蒼の城門》に弾かれ、それと同時にデュノアが右腕に展開した61口径アサルトライフル、ガルムをボーデヴィツヒに向けて構えた。

「こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人は随分と沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホットなのかな？」

「なににせよ、周囲の状況を鑑みずに発砲するような間抜けって言うのは間違い無さそうだな」

「貴様ら……！」

「やるなら俺が相手になってやるよ。そんで一分で教えてやる。完成してないAIC如きじゃ俺を止めるのは不可能だつてことをな」

「吼えるのも大概にしる。貴様如き、私の黒い雨の錆シュバルツェア・レーゲンにしてくれる」

ボーデヴィツヒは自分の置かれている立場も理解していないようで、俺らに向けて圧倒的なまでの威圧感で威嚇している。

俺は大型のレールカノン、メテオライトW-84を展開してボーデヴィツヒに向かって構えたが、それと同時にアリーナに怒声が響き渡った。

『その生徒！ 何をやっている！ 学年とクラス、出席番号を言え！』

いや、こっちは専用機なんだからそんなの言う必要無いだろ、と思ったが、ボーデヴィツヒはさっさと武装解除してアリーナのゲートへと去っていった。

……なんだかなあ。

2 - 1 (後書き)

原作準拠で話を進めると面倒になるって言うのが最近になってようやく分かってきました。

主人公の設定（前書き）

更新しますた。

主人公の設定

仮名 レイス・ファルクフェルト

本名 アナスタシア レイソニアⅡ AⅡファルクフェルト 男

182cm 69kg 11月4日生まれ BO型 RH-

容姿 S

身体能力 S

頭脳 S

IS適正 A

蒼髪碧眼の珍しいタイプ。

特技

料理全般。和洋中何でも作れる。

紅茶を淹れるのが得意。本人曰く、水出しの安い紅茶でも最高級の物に劣らない味を出せる。

英語と日本語のほかに、ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語、ポルトガル語、スペイン語、韓国語など、多くの言語を話せる。

趣味

家庭菜園。実家では紅茶の葉や大麻（食用として）などを栽培している。

機械いじり。ジャンク屋に行くのがレイスにとっての最高の至福。

好きなもの

アニメ、ゲーム、マンガ、紅茶、工具、日本料理、戦隊物

好きな（得意な）人のタイプ

包容力のある人間、誇り高い人間、ギャップのある人間、自分と話の合う人間

例：セシリア、シャルロット、ラウラ、簪、虚など

嫌いなもの

退屈、パサパサしたもの、キノコ

嫌いな（苦手な）人のタイプ

厳しい人間、やたらと暴力的な人間、気難しい人間、行動原理がよく分からない人間

例：箒、鈴音、千冬、楯無、本音など

専用IS フォートレス 難攻不落の要塞（レイスは要塞と称す）
ワンオフ・アビリティー アンチ・マテリアル
唯一仕様能力、非物質化

所得資格

危険物全種、ボイラー技士、溶接管理技術者、エネルギー管理士、毒物劇物取扱責任者、総合無線通信士、電気工事施工管理技士、その他十数個。

オーストリアの国家代表IS操縦者

性格

温和で人の良い人間。心は寛大で、大抵のことは笑って受け流す。真面目で冷静。気難しいタイプではなく、普段からいろいろな人と一緒にいる。

顔は広い。世界中に知り合いがいて、様々な分野に精通している（裏世界の人間ともつながりがある）。

一夏同様、若干鈍いところがある。

《難攻不落の要塞》

レイスの専用機で、レイスが自作した第五世代型IS。外見は日本が制作した打鉄と同じような形をしているが、細部は全く違う造りになっている。待機状態は首に巻かれたチョーカー。

第五世代型ISに標準装備されている追加展開装甲を展開した場合、大きさは通常時のおよそ2.4倍に膨れ上がる。その場合、動きは極端に遅くなり（普通乗用自動車と同じレベル）、10m以上浮けなくなる。イメージは重装戦車。他のISには無い陸上での戦闘能力もある。

唯一仕様能力は非物質化。3秒間だけ有効で、それを使っている間は自分が触れている者すべてに透過属性が付く。一日に4回使用可能。

《IS武装》

オベリオン

レイスが持つ数少ない近距離武器。元々要塞は遠距離型のため、近距離武器が極端に少ない。特に特殊効果を持たないが、とてもリーチが長く、重く硬いという特徴がある。

グロスヴェルヴァ

Ver·ultima状態でのみ使用することが出来るレイスの近接系最強武器。第五世代型の特徴である追加展開装甲を武器に転用したもので、その性能はとても高く、破壊力は紅の砲台にも劣らない。

メテオライトW-84

超大型の実弾銃。追加展開装甲を装着していないときにレイスが使う遠距離射撃武器。

攻撃力はレイスの武器の中ではかなり低い（84口径だが）。まるで隕石のように迫ってくる弾丸の雨は、ほんの十数発あたれば戦闘を即終了させられるほど。

紅の砲台

要塞に装着される超大型の実弾砲。弾丸の大きさは15・46?で、一撃で山を一つ消し飛ばすほどの威力がある。レイスが装備している武器の中では最強の威力を誇る。

蒼の城門

要塞に装着される超大型の盾。防御能力は極大で、一夏の零落白夜でもシールドエネルギーを30以上削れない。表面にはエネルギーを放出するための弁があり、そこから小型から大型までのフレア弾をいくつも射出することが出来る。

白の外壁

要塞に装着される超大型の装甲。蒼の城門と同じく防御能力は極大で、ありとあらゆる攻撃を撥ね返す。表面には100門以上の砲台が完備されていて、そこから9・62mmの銃弾が火を吹く。

黒の側溝

白の外壁と共に装備される銃弾を受け流すための溝。そこに嵌った銃弾を電磁力の機構で再び相手に向かって撃ち出すということも出来るため、要塞が銃弾を切らすことはあまりない。

要塞に装備された機構

D I C " D y n a m i c I n e r c i a l C a n c e l l e r
A I C の 発 展 型。力学的エネルギーの完全停止。

自分の念じた空間、半径3m以内のありとあらゆる力学的エネルギーをゼロにするもの。A I C に 比 べ、遙かにエネルギー効率が悪いが効力は絶大。

主人公の設定（後書き）

感想など付けてもらえれば嬉しいです。

あの後、俺とデュノアは部屋に戻って優雅に紅茶を飲んでいた。

「このダーズリンおいしいね。これもイギリスのもの？」

「いや、これは俺がオーストリアで栽培してたやつだ。お前にだけ言うけど、俺の趣味ってガーデニングとかそういうやつなんだよ」

「へえ。僕も実家では菜園とかやってたんだ」

「そうだったのか。じゃあ、今度ここでも何か育ててみるか」

「いいね。そういうことだったら本国の方から種とか取り寄せるよ」

そんな感じの他愛無い話をする。俺とデュノアの最近の会話なんてこんな感じで、他愛無いにも程がある。デュノアが女だというのは既に核心に変わっていたが、前みたいに変な夢が横入りしてくると困るから追求はしてない。

俺がここに来る前にいた施設では当然IS関係の人間は女ばかりだったため、同室の人間も女子だった。だから、同室の人間が女子だろうと気にはしてない。

まあ、この間上半身裸で部屋で筋トレしてたら、部屋に入ってきたデュノアが悲鳴を上げるというちょっとしたハプニングはあったけど。

「そろそろ夕食の時間だね」

「ああ、んじゃ行く……か……」

「レイス？」

あ、やべ。俺って紅茶飲むと眠気が襲ってくんの忘れてた。

俺の意識はそれを自覚したと同時に、プツツリと切れた。

「あ……」

それから意識を取り戻したのは、意外と早く十分後の事だった。

デュノアはもう食堂に行ったのか——そう考えていると、浴室から水の流れる音が聞こえてきた。どうやらシャワーを浴びているらしい。

（そう言えば、リンス切らしてたっけな）

俺は唐突にそう思い至り、部屋の戸棚の中から詰め替え用のリンスを取り出し（日本のは結構品質がいい）て脱衣所に向かう。デュノアはまだシャワーを浴びているようで、浴室の中からは水が流れる音が連続して聞こえている。

ついでに昨日洗って干しておいたタオルをベランダから回収して再び脱衣所に向かう。一応乾燥機とかはあるけど、綿製品を乾燥機で乾かすと縮むんだよな。

そんなことを考えながらタオルをしまっていると、後ろのほうで浴室の扉が開く音がした。俺はその音に反応して、素早く振り返る。

そこには、裸体の女子がいた。

「ぶっ！」

「れ……レイス……」

そこにいたのは当然のように素っ裸のデュノアで、俺は情けなくも鼻血を吹きだしていた。

まるで雪のように真っ白な肌。解かれた髪からは水滴が滴っていて、白い双丘の頂上には桃色に色づいた（自主規制）――

「あ、ああ……」

「待てデュノア、これは不可抗力――」

「いやあああああっ！」

「ごふあっ！」

デュノアが悲鳴をあげると同時に俺の顔面にシャンプーのボトルが飛来して直撃。人中（鼻の下あたりにある急所）に直撃して脳震盪を起こした俺の意識は、急転直下のように深い闇の底へと沈んでいった。

「ん……」

そして再び起床。時間はあれからさらに十分経っていた。これでこの短時間の間に二回意識を失ったことになる。

ゆっくりと体を起こして鼻のあたりを触る。どうやら鼻血は止まっただけ。が、隣のベッドでは憤ったような、それでいて悲しそ

うな顔をしたデュノアがいつものジャージ姿で体育座りをしていた。

だが、俺は何も聞かない。そのうち何かの拍子に気づく日はある
と思つてたし、それがたまたま今日だっただけのこと。別に何も思
うところはない。

「……何も、聞かないの……？」

「何もつて、何を？」

俺がそう聞き返すと、デュノアは逆に沈んだような顔をした。な
んとなくデュノアにそんな顔をさせるのが嫌で、俺はある程度自分
の中で答えの出てる質問を口にした。

「なんで男装なんかしてたんだ？」

「それは、その……実家のほうからそうしろって言われてて……」

「実家……デュノア社の社長——ガルクさんからか」

「なんでレイスが僕の父の名前を知ってるのかは聞かないけど、そ
の通りだよ」

デュノアはさっきよりさらに沈んだ表情で語り始めた。

「僕はね、父の愛人の子なんだ。引き取られたのが二年前。丁度母
さんが亡くなった時に父さんの部下がやってきたんだ。それで色々
と検査する過程でIS適性が高いことが分かつて、非公式ではあつ
たけどデュノア社のテストパイロットをすることになったんだ」
「……………」

「父に会つたのは二回くらい。会話したのはもうちょっと多いかな。
普段は別邸で暮らしてるんだけど、一度だけ本邸に呼ばれたことが
あつてね、あの時は酷かったなあ。本妻の人に、『この泥棒猫の娘
が！』って殴られてさ」

「それはお前のせいじゃないだろ。どうしてそこまで」

「全くだよね。母さんも前もって教えてくれてれば、僕だってあそこまで戸惑わなかっただろうに」

まあ、会ったことはないけどデュノアの母さんがデュノアに打ち明けなかった理由は分かる。二年前に引き取られたって言うことは、その時のデュノアは13、4歳。子供に打ち明けるような話でもなかったんだろう。

「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったんだ」

「まあ、時代は第三世代型ISの製造に取り掛かってるからな。最後発とは言え、第二世代型じゃもう既に出遅れてる感はあるからな」

オーストリアではすでに第五世代型ISの製造に取り掛かってるし。

けど、これedyやく繋がった。どうやら大まかな部分は俺の予想通りだったらしい。

「要するに、当初の目的は一夏のISのデータを盗んでくるってことだったんだな？」

「……うん、その通りだよ。フランスはただでさえIS技術が進んでいないんだ。僕が男装すれば一夏に近づくのは容易になるし、それなりに仲良くしておけば簡単に白式のデータを手に入るはずだった」

けど、それはデュノアの意志ではなく父に強要されたから仕方なく、ってことだ。

「でも、レイスにばれちゃったし、多分僕は本国に強制送還だろう」

ね」

「仕方がないことだな。大体、ISに乗れる男子だつて偽った拳句に日本へのスパイとして入国したってことだろ？ 良くて終身刑、悪ければ極刑だな」

「でも、これは僕のせいでもあるから。運命とも言えるかもしれないね」

そう言つてデュノアは苦笑いする。まるで、自分自身を偽るかのように。

「嘘だな」

だから、俺は今のデュノアを全否定することにした。

「こんなところで死んでいいなんて思つてる筈ないだろ。このまま本国に戻つたら、間をおかずに刑が執行される。そうなつたら、お前の人生は完全に終わりだ。そんなこと、死んだお前の母さんが喜ぶとも思つてるのか？」

「思つてないよ。でも、仕方がないことだから」

「そう言つて、何もせずに諦めるのか？」

「諦めるんじゃないよ。受け入れるんだよ。今の僕を。そして、これからの僕を」

そう言つて、また笑う。いや、嘲笑^{わら}う。自分を。なにも出来ない、自分を。

「——っ」

そんなことはさせない。どうしてもかは分からないけど、こいつがそんなに悲しそうに笑う顔を見たくない。

だったらどうすればいいか。簡単だ。俺が見て見ぬフリをすればいい。誰にも明かさず、誰かにばれたら俺が守ってやればいい。

「……行く場所が無いんだろ？」

「え……」

「だったらここにいろ。俺如きができるようなことなんてたかが知れてるけど、行き場が無いんならここにいろ。ここにいろ限り俺がお前を守ってやる」

「……っ」

デユノアは信じられないとも言いたがっているかのように目を見開いて口を抑える。

「お前をかばうことで俺まで罪に問われるんなら、俺はこの世界を捨てる。そして、お前のためだけに戦ってやる。そこで、お前が二度と苦しまなくていい世界を作ってやる」

なんか青臭いセリフを吐いているのは自覚しているが、今は恥ずかしさよりも怒りのほうが先行している。自分でもどうしてこんなに腹が立つのか分からないけど。

「だから、そんな悲しそうな顔すんな。この世界で、俺だけはお前の味方でいてやるから」

「うつ……うわあああああん！」

多分、今まで泣きそうながあっても泣かずに頑張ってきたんだろう。まだ年端もいかない女の子なんだ。それぐらいの権利があってもいいはずだ。

自分の感情をすべて吐き出すように泣き続けるデュノアの肩を抱いて、俺はずっとデュノアを慰めていた。

2・2（後書き）

何も考えずに書いていますので、何かご不満な点等ありましたらお気軽にどうぞ。

感想等お待ちしておりますm（＿）m

あれから少し経った日の放課後。俺、一夏、デユノア、篠ノ之の四人は第三アリーナへと向かっていた。今日はどうやら使用人数が少ないらしく、思う存分訓練が出来ると思っていたんだが――。

（この匂い……硝煙か……？）

第三アリーナからは何かが焦げるような匂いと硝煙の匂いが漂ってきた。それだけなら別に珍しい事じゃないんだが、この学校に置いてある打鉄もリヴァイブも実弾兵器を積んではない。つまり、実弾兵器を使えるのは専用機持ちである俺、一夏、デユノア、鳳、オルコット、ボーデヴィツヒ、その他この学校にいる四人の専用機持ちだけだ。

ただし、一夏は実弾兵器を積んでないから最初から除外。同様の理由で鳳も。オルコットは実弾兵器ではなくBT兵器だし、俺とデユノアは現在進行形でここにいるから同様に除外。となると、アリーナで実弾兵器を使っているのはボーデヴィツヒを含めた残りの専用機持ちだけという事になるが、あいつが誰かと訓練をしているとは考えづらい。ただでさえ友達出来ないタイプだと思うし。

「どうかした？」

「ん？ ああ、いや。なんでもない」
「そう？」

考え事しているとデユノアが不審そうに俺の顔を覗き込んだ。きた。

「そう言えばさ、一夏ってちゃんと白式のメンテナンスしてるのか？」

俺は最近気になっていたことを聞いてみる。すると、案の定俺の予想通りの答えが帰ってきた。

「え？ メンテナンスってしないと駄目なのか？」

「一夏……それはないよ……」

見ると、デュノアも侮蔑っぽい視線を投げかけていた。俺は流石に侮蔑の視線を向けたりはしないけど、若干の哀れみの視線は向ける。もちろん一夏ではなく、白式に。

「細かい部分は整備課の人間に手伝ってもらわないと出来ないけど、大まかな部分だったら一人でも出来るんだからちゃんとやったほうがいいぞ。特に白式なんてまだまだ未完成の機体なんだから、今のうちにちゃんとやっておかないと第二形態移行セカンド・シフトのときに変な風になるぞ」

「前から気になってたんだけどさ、その第二形態移行っていつなるんだ？」

「お前じゃまだまだだ。俺は既に第三形態移行サード・シフトまでしてるからいいけど、他は全員第一形態のままだからな。専用機を貰って一ヶ月足らずじゃ第二形態移行なんてまだまだだ」

「……そんなもんなのか」

まあ、形態移行シフトチェンジする条件みたいなものもあるにはあるけど、確実じゃないし。

「前にお前と模擬戦したときにちよつと見てたけど、白式の機体反応速度とスラスタ出力絶対に合って無いぞ。ただでさえ零落白夜

にエネルギー使いがちなんだから、そういうところはしっかりとやらないと駄目だ。なあデュノア」

「うん。僕も一週間に一回は必ずメンテナンスするようにしてるし、戦闘中に銃が誤作動起こしたら笑い話じゃ済まないからね」

「なるほど。勉強になる」

そんなことを一夏たちと話してる間に第三アリーナに到着。ただ、そこではやたらと慌ただしく生徒が騒いでいた。

「なにかあったのかな？」

「さあ？」

一夏とデュノアは能天気会話をしている。と、そんな俺らのところに一人の女生徒が走り寄ってきた。

「あ！ レイス君、丁度良かった！」

「あ？ 俺か？」

「大変なの！ 今一組の専用機持ちの人達が乱闘してて——」

そこまで聞いて、俺はホールに向かって駆け出した。それに機敏に反応したデュノアとワントンポ遅れた一夏が後ろからついてくる。

そして、ゲートをくぐった瞬間「ドゴオンッ！」という激しい爆発音がアリーナの中に轟いた。もくもくと上がった黒煙の中から二つの機体が飛び出してくる。一つはブルー・ティアーズ、もう一つは甲龍^{シェンロン}だ。

「鈴！ セシリア！」

黒煙の中から出てきた二人を目測して一夏が声を上げる。だが、

特殊なエネルギーシールドで隔離された観客席とホールじゃ完全に声が遮られて届く事は無い。

そして、黒煙が晴れるとそこには漆黒のISが宙に浮いていた。少し前に見た、ボーデヴィツヒのシュヴァルツェア・レーゲンだ。

鳳とオルコットは果敢にボーデヴィツヒに向かっていくが、シュヴァルツェア・レーゲンに搭載されたAICの壁に阻まれて満足に攻撃することが出来ていない。

そこからの展開はまさに一方的だった。鳳もオルコットもシュヴァルツェア・レーゲンの前に歯が立たず、殆ど反撃する暇もなく一方的に攻撃されていた。まあ、それも当然の事だ。ブルー・ティアーズは一对多数の戦闘を想定して作られたものであって、本来タッグを組んで一人を相手にするような機体じゃない。

同様に甲龍も一对一、もしくは一对多数を相手にすることを想定した機体であるために、タッグを組んで戦闘を行うようなタイプじゃない。

そんな二人がタッグを組んだらどうなるか。1+1は2だが、ただでさえ相性の悪いあの二人が組んだらその数値はマイナスにもなりかねない。

「あのままだとあの二人、死ぬな」
「そんなことはさせねえ！」

一夏はそう叫ぶと、一瞬にして白式を展開して零落白夜を発動。そのままエネルギーシールドを突き破り、ボーデヴィツヒの元に^{とっ}喊着^{かん}して行った。

「おおおおおおつ!!」

「――馬鹿が」

俺は即座に要塞を展開。フォートレスそして、要塞に搭載されたA I Cの発展型、D I Cを一夏の周囲に展開する。その瞬間、一夏の動きが完全に止まり、白式が地面に落ちた。

「お前が突っ込んだところで何も出来ねえだろうが。ここは俺に任せとけ」

「レイス……!」

一夏が俺を睨んできているが、それは軽くスルー。

「ボーデヴィツヒ、俺が相手になってやるよ」

「ふん、オーストリアの試作型が相手か。私相手にどこまでやれるものか見ものだな」

「それでも一応国家代表だからな。候補生程度には負けないよ」

そう言いながら俺は追加展開装甲の《紅の砲台》、《蒼の城門》、《白の外壁》、《黒の側溝》を展開してボーデヴィツヒを見据える。追加展開装甲四つを展開した時の要塞の機動力は通常時の約二十分の一だが、紅の砲台から放たれる銃弾はホーミング性能が付いているからそれほどハンデにはならないし、近、中距離だったら俺のI Sに搭載されたD I Cが役に立つ。

D I C。ダイナミック・イナーシャル・キャンセラーの略。オーストリアが開発した第五世代型I Sに標準装備されているシステムで、D I Cが作用している空間では全ての力学的エネルギーが無効になるという優れものだ。

まあ、こつちも第三世代型ISのAICと同じで実用化の目処が立ってないんだけど。俺のISに注ぎ込まれてる技術はある意味全部実験段階のものだし。

でも、そろそろ無知なお子様に世界の真理と理不尽さを教えてあげましょうかね。

「『フォートレスモード・シフト フルパッケージ 要塞、形態移行。装甲換装。V e r デルタ。δ。起動』」アウエイクン

俺が要塞に音声信号での命令を口にとすると、要塞に装着された追加展開装甲の外装が弾け飛び、そこから桃色に輝くエネルギー体の翼が生えた。

さらに、武装の大部分が素粒子分解し、新たな形を作っていく。さっきまでの堅牢な要塞のような造りから、今度はスピード感溢れる流麗な形へと。

「なっ……」

「AIC如きで止められるものなら止めてみる」

翼に要塞のエネルギーが集束していくのを感じながら俺は前に向かって飛び立つ。追加展開装甲を換装した場合の速度はせいぜい乗用自動車と同じレベルだが、今の要塞は形態移行をしたデルタ型（普段の要塞は攻撃、防御力を重視したイータ型）。その最高速度は、ステルスの七倍。

つまり、音速の七倍だ。

「出て来い！ グラム 全き剣！」

俺は再び音声信号で要塞に命令を出すと、俺の手の中に白銀に輝く一本の長剣が現れた。特に追加効果を持たない武器だが、その重さと硬さは俺の持つ近距離武装の中でも最高ランクのもの。

攻撃の威力は速度の二乗と重量、攻撃の当たるポイントなどによって決定する。俺の武器の重さはかなりのもので、スピードは音速の七倍プラス剣を振るう速度。そして狙いは、絶対防御が働いていながらもISの構造上一番弱いポイントの、背部。

「ぐっ……！」

ボーデヴィツヒは俺の動きに何とか食らいつこうとして体を捻るが、遅い。

「おらあっ！」

ガギンッ！ という音と共に火花が散り、俺の前からボーデヴィツヒが弾かれるように飛んで行き、何故か俺の体もアリーナの壁に向かって吹き飛ばされた。

「やれやれ……これだからガキの相手は疲れる」

俺を吹き飛ばした相手を目で追うと、丁度俺とボーデヴィツヒが接触した地点の真下に、何故かIS用の武装を手に持った織斑先生がいた。

……まさか、生身で俺を弾き飛ばしたってのか？

そんなはずは無いと思ったが、同時に織斑先生ならやりかねない

アリーナに、物凄い大声が響き渡った。

確かに、自己紹介の時点ではそんなことは言わなかった。言う必要が無いと思ってたし、ファルクフェルトなんてファミリーネームは俺の知る限り一つしか存在しない。だからみんな分かった上で俺に接してきているんだと思ってたんだけど……。

「とにかく、アリーナのバリアまで壊されるような事態になるとさすがにこちらでも看過できないからな。この戦いの決着は学年別トーナメントで決めてもらう。織斑もレイスもそれでいいな？」

「あ、ああ……」

「教師には『はい』と答えろ、馬鹿者」

「俺はそれでも構いませんが……」

「どうした？ 何か問題があるか？」

「いえ……問題と言うか……」

俺は歯切れを悪くしながら言葉を紡ぐ。まあ、俺だと一番の問題が浮き彫りになってくるんだけど……。

「俺、一人だけ国家代表じゃないですか。そんなのがずぶの素人とやりあってもいいんですかね？」

「ああ、そうだったな。まあ、そのことは後で検討しよう」

そう言って織斑先生はアリーナの中にいるすべての生徒を見回して一言。

「それでは、学年別トーナメントまでの間私闘の一切を禁止する。解散！」

織斑先生が叩いた手のひらの音は、まるで銃声のようにアリーナの中に響き渡った。

六月も最終週に入って学年別個人トーナメント当日。俺は一夏とデュノアと共にアリーナの更衣室に来ていた。

だが、俺がここにいる必要ははっきり言って無い。なぜなら、俺は学年別個人トーナメント（タッグ形式になったからすでに個人ですらないけど）にはエントリーしてないからだ。

理由は大きく分けて二つ。一つ目は、本国から「最近お前要塞の性能見せびらかしすぎじゃね？」的な通告が来たことだ。

俺の作ったISなんだから自由にやらせろよとは思うものの、本国としてもこれ以上俺に好き勝手にやられるのは看過できなくなっただろう。体面とか体裁って面倒だな。

で、二つ目。これはもうどうしようもないのだが、一年生の中で俺は群を抜いているため、そのまま参加すると実力差がありすぎて話にならないという理由からだ。

専用機持ちがやたらと多いにもかかわらず、今年の一年生は総じてレベルが低い。それは俺もこの学園に来てすぐに思ったことだったが、第三世代型ISを使う生徒が現時点で三人もいるのにその性能を全く使いこなせていないのが現状だ。

そんなところに第五世代型ISを持った国家代表IS操縦者が入っていけばどうという結果になるか。素人目にも明らかだろう。

そんな理由で、俺は織斑先生の手によって出場禁止にされたのだ

った。ある意味ラッキーだ。

なぜなら、俺たちが今見ている更衣室に備え付けられたモニターには、各国のIS関係者が大量に集まっているというとてもない状態が映し出されているからだ。

しかも、中にはオーストリアの人間も当然いるわけで。気が滅入るってもんだ。

さらに気が滅入る話がある。俺たちが見ているモニターには前述の通り各国のIS関係者が映っているわけだが、その中に一人、群を抜いて存在感のある女がいるのだ。出来れば目を合わせたくないタイプの女——というか、俺の姉上が。

俺と同じ深い青色の髪に透き通るような碧眼。整った顔立ちは見る者すべてを魅了する魅力に満ちているが、いかんせん目つきが悪いため（その目つきを凜々しいというバカが多くて困る）、家でもあまり顔を合わせたくないのだ。

しかも恐ろしいことに、俺の姉上は第一回モンドグロッソの大会でその頃の織斑先生に負けはしたものの第二位。準優勝者だ。

そんな姉上に一か月もISの訓練をさせられた俺の気持ち、誰か分かってくれるだろうか。

……分かんないだろうなあ。

ともかく、俺は今人前に出られる状態じゃない。そのうち出ないといけないのは分かっているが（隣国や外交国への挨拶とか）、これでも第一王子だからいろいろと大変なんだ。

「各国の関係者が勢ぞろいだね。レイスの国の人はいるの？」

「ああ、あそこにな」

俺が指さした先には、俺の姉上を始めとする議員や整備管理者、その他数名がいる。

「フランスは……あれか」

「幸い僕の父はいないみたいだけどね」

「あんなことがあった後じゃ流石に顔合わせづらいだろ」

「うん……。さすがに、ね」

デュノアは一気に十歳ぐらい老けこんだような顔をしながら笑う。首にぶら下がった待機状態のISが寂しそうに揺れた。

本来だったらデュノアはISを取り上げられていたらしいが、俺のちよつとした根回しとちよつとした策謀によってデュノアは代表候補生を続けられることになった。ここで明言はしないが（したら俺は王族であろうと投獄は免れない）、俺はデュノアの未来を守ったのだと一応ポジティブに考えておく。

「じゃあそろそろ作戦会議でもやるか。ボーデヴィツヒのAICの対策法だったな」

「ああ。今のところAICの対処法はないし、DICを積んでるお前だったら何か対処法もわかるだろ？」

「分からなくはないけどあんまり意味無いぞ。特にこの試合はタッグマッチなんだから、一人一殺のやり方だと片方が弱いほうを相手にしてる間に時間切れだ」

「弱いほう？」

「勝負の鉄則を考える。RPGとかでもそうだけど、強い奴を先に片付けるより弱い奴から片付けて行ったほうが効率がいい。特に、弱いと思ってたやつが意外な伏兵だったりするから、強い奴を重点的に倒そうとすると必ず足元を掬われる。かと言って弱いほうを先に倒そうとすれば、強い奴に攻撃のチャンスを与え続けることになる。バランスが大切ってことだ」

「じゃあどうすればいいんだ？」

「聞いたところによるとボーデヴィツヒのペアは篠ノ之らしいから、一夏はボーデヴィツヒの陽動、デュノアは篠ノ之を先に片付けるのが最善な方法だと思う。AICはエネルギーの消費が激しいし、なによりAICを使う時は全神経を集中させないといけないから二対一なら勝つ確率はかなり上がる」

篠ノ之には悪いけど、勝負ってそういうものだとか割り切ってもらいたい。

（それに、トーナメント表はちょっとハッキングして弄くったしな）

そう考えた直後、更衣室の別のモニターにトーナメント表が映った。どうやら対戦表が決まったらしい。

（ま、俺は全部知ってるけどな）

そつほくそ笑みながら対戦表を見る。

一回戦は、一夏・デュノアペアVS篠ノ之・ボーデヴィツヒペア
だった。

一応事前確認。

このまま本文を続けていくと、この物語の本題に入るまでかなりの時間が掛かると予想されます。

そのため、次に小説を投稿するまでの間にこの小説を読んでくださっている方々へお願いがあります。

本題は原作五巻、文化祭が終わったあたりから始まります。僕が書いている二次創作小説、『IS』難攻不落の要塞』は現在二巻の終わりあたりに来ているわけですが、正直本編に入るまでのプロセスがかなり面倒になってきたということもあって、僕の頭の中にくつかの選択肢が出てきました。その中で、「これだ」と言うものを選んでいただけたら光栄です。

1・甘ったれてないでさっさと続き書けや。

2・あまり本編と変わらずにストーリーが進むならこのまま次に飛んでもいいんじゃないか？

3・そもそも今の時点でレイスに立っているフラグはどうなるのか、そこだけでもはっきりしてくれ。

4・どうでもいいわ。お前の小説なんてなんとなくお気に入り登録しただけだし。

5・諦めたら、そこで試合終了だよ？

以上五つです。

2・5（前書き）

なかなか厳しい言葉から優しい言葉までいろいろな言葉で諭されましたので、このまま本編を継続しようと思います。

ただ、ラウラとの戦闘シーンにレイスが出てこないため、かなり省略することになると思います（僕も作者の端くれなので一応ちゃんとやりますが）。

アリーナに音高々に開始のブザーが響いた途端、一夏はボーデヴィツヒに向かって瞬時加速をし、一気にその間合いを詰めて行った。

ボーデヴィツヒは強い。国家代表である俺には遠く及ばないものの、おそらく強さだけなら俺のことを数えなければ学年1だろう。シュヴァルツェア・レーゲンの積まれた装備をほとんど使いこなしているのもそうだが、あの織斑先生が直々に教え込んだだけのことはある。

「ああっ、一夏さん！ そんなに安直に突っ込んではいけませんわ！」

「あんたの攻撃は読みやすいつて教えたばかりでしょうが！」

「……俺も、隣の二人がうるさくなければ普通に応援できたんだろ
うなあ……」。

「っーかさ、お前たちを素直に応援したらどうだ？ はっきり言っ
て好きな奴に対しての態度じゃないぞ、それ」

「は……はあ！？ いきなり何言つてんの！？ あ、あたしと一夏
はそんなんじゃない……」

「そうですわ！ 何を根拠にそのようなことを仰っているのかしら
！」

「……分かりやすいな、お前ら」

一つため息をついて再び戦況を見る。一夏はすでにボーデヴィツヒのAICに捕えられ、身動きが取れない状態だ。あのままだとシュヴァルツェア・レーゲンの肩部に装着されたレールカノンの餌食

になるのは必然だろう。

まあ、一対一だったら。

『させないよ』

ISの解放回線からデュノアの声が聞こえ、それと同時にボーデヴィツヒの頭上にバースト弾の射撃がボーデヴィツヒの頭上に降り注いだ。

『ちっ』

レールカノンの軌道をずらされたボーデヴィツヒがAICを解いて後ろに下がる。だが、デュノアは自身の特技である『ラビット・スイッチ高速切替』を使ってボーデヴィツヒを追撃する。

「それにしても、デュノアは流石ね……」

「リヴァイヴの特性を理解してあそこまで使えるような人はそうそういませんわ」

そんな様子を見ていた鳳とオルコットは感心したように息を漏らす。だが、それも当然だ。

高速切替自体はリヴァイヴのようなISだったらどれでも使えるけど、武器の特性を完全に把握してその時の状況にあった武器を選択するのはかなり難しい。実際、俺の要塞も高速切替は使えるけど、デュノアのレベルには達しないだろう。

（デュノアさえ協力してくれればすぐにでもあのISが完成するんだけどな……）

「？ レイスさん、どうかなさいましたか？」

「ああ、ちよつと考え事をな」

まあ、現時点で叶いそうの無い夢は見ないことにする。

「レイスさんはどちらが勝つと思いますか？」

「6：4で一夏たちに懸けてる」

「それはまた……辛辣ですわね」

「そうか？ 妥当な線だと思うけど」

はつきり言つて、一夏たちがボーデヴィツヒに勝てる確率は30%がいいところだろう。デュノアとボーデヴィツヒの一对一だったら勝てる確率はもう少し上がるけど、正直今の一夏じゃタッグプレイには邪魔にしかない。それでも一夏とデュノアが上手くやれるのは、デュノアが一夏に上手く合わせているからだろう。

「……気に食わねえ」

「え？」

「いや、なんでもない」

なんでか分からないが、今胸の奥で何か黒い感情が渦巻いたような気がした。

「さて……そろそろ戦況が変わる頃か……」

俺がそう呟くのと、デュノアが篠ノ之の乗った打鉄のシールドエネルギーを消し去ったのは殆ど同時だった。

それから数分。戦況は一夏たちのほうに大きく傾いていた。

ゼロ距離から撃ちこまれたデュノアの近距離武器、《グレー・スケイル灰色の鱗殻

》から打ちこまれた杭のせいでボーデヴィツヒのISのシールドエネルギーは大きく削られ、機体には最早戦闘継続は不可能なレベルの損傷が出来上がっていた。

「機体の能力を過信しすぎたな。ボーデヴィツヒの負けだ」

「この状況をここから覆すのは相当難しいですわね……」

「いい気味よ！ そのまま負けちゃいなさい！」

おい鳳、お前は小学生か。

それとなく俺とオルコットは鳳から離れる。だが、鳳はそれに気付いた様子も無くボーデヴィツヒに罵声を浴びせている。

……俺、ああいう女子苦手。

「けど、このまま終わるとは思えないな……」

「そうですわね……何か嫌な予感がしますわ」

「……………よし」

「？ どこに行きますの？」

「ちょっと野暮用」

俺は何か言葉をかけてくるオルコットを無視してアリーナに隣接した更衣室へ向かう。

当然というかなんと言うか、俺以外の人影はなく、更衣室の中は閑散としている。だが、今はその方が都合がいい。

「出てこい、要塞」
フォートレス

首筋のチョーカーに手を当てながらそう呟くと、俺の体を一瞬にして光の粒子が包み込み、あっという間にISが展開された。

オーストリアの独自調査の情報によると、ボーデヴィツヒのIS、シュヴァルツエア・レーゲンには今《Valkyrie Tracking System》が搭載されているらしい。あまり言いたくもないし公言も出来ないが、いわゆる^{スハイ}工作員というやつだ。俺がフランスのデュノア社に手をまわしたのもそういう部分が大きい。

（本当のことを言えば、このまま何も無ければ一番良いんだけど……）

そんな願いも虚しく、アリーナのほうから高圧電流が走るような音が聞こえてきた。

2・5（後書き）

とりあえずここまでです。それで、今迷っていることがあります。現時点ですでにシャルロットのフラグがレイスに建っているんですが、ラウラのフラグを建てるかどうかということです。それ次第で今後の展開が変わってきます。

何かご意見等ありましたらお気軽にどうぞ。

2 - 6 (前書き)

はつきり言います。展開が無茶苦茶です。
途中までは結構普通に話が進むんですが、途中からやっちまった感のある文章へと変貌しました。

「あああああああつ！！！！！」

ワンオフ・アビリティー アンチ・マテリアル
唯一仕様能力の非物質化を使ってアリーナに入った直後、ボーデ
ヴィツヒが突然身を裂かんばかりの悲鳴を発した。同時にシュヴァ
ルツェア・レーゲンから青白い稲妻が走り、至近距離にいたデュノ
アを吹き飛ばしていた。

俺は即座にAICを展開し、デュノアが飛んでいく軌道上に慣性
停止結界の網を張る。すると、まるでそこに吸い込まれるかのよう
にデュノアはAICに嵌り、安全を確認したうえで俺はAICを解
いた。

「やっぱり起動したか……」

VTシステムは使用者の身体状況や精神状況などが起動に大きく
かわる。おそらくダメージレベルがC以上になって、機体操縦者
がキレるか何らかの精神状態になった時に作動するようにプログラ
ムされていたらしい。

ボーデヴィツヒが乗っていたシュヴァルツェア・レーゲンは最早
原形を留めておらず、ボーデヴィツヒの体を包み込むように粘土細
工のようになっていた。しかも、どこか大人の女性を思わせる形で、
それが誰かに似てる気がする。

「ね、レイス！？　なんでこんなところに！？」
「国家機密だ」

こんなところで国の名前を出されたら本国も迷惑だろうけど、VTシステムは放っておくと厄介なことになる。世界でも既に開発することを禁止されているから、IS開発に関しては最先端を行っているオーストリアでもVTシステムの全貌を明らかにはしていない。だから、俺がここにいるのもVTシステムの調査と言うところが大きい。

……けど、なあ……

(また姉上に叱られそうだ……)

今回ののは完全に俺の独断専行で、しかも来賓席には姉上や下手したら国王陛下^{父上}までいる。結構甘やかされてはいるけど、叱る時は叱る人たちだから、今回の件が無事に済んでも当分は謹慎処分とかやらされそうだ。

まあそれはともかく。

「ここは俺に任せとけ。一夏もデュノアも、シールドエネルギーそんなに残って無いだろ？」

デュノアはともかく一夏は零落白夜を使ったせいでシールドエネルギーは完全にゼロ。デュノアはまだ残ってる筈だが、問題はVTシステムの起動と同時にボーデヴィツヒの手中に現れたある武装。

現役時代の織斑先生が使っていた近接武器、雪片に酷似した刀剣が握られている。

VTシステムはトレースしたものの能力そのものを使うようなものだったはずだから、仮にあれが現役時代の織斑先生をトレースし

たものなら普通の人間に勝ち目はない。まあ、そもその素材がシユヴァルツェア・レーゲンだからそこまでの強さにはなつて無いと思うけど、それでも用心に越したことはない。

「でもま、そこまで手間はかからないだろ」

そう言いながら俺は要塞を空中に浮かばせる。そして、俺が本気モードの時にだけ使う命令を口にした。

フォートレスモード・シフト フルパッケージ
「要塞、形態移行。装甲換装。Ver・Ultima。起動」

その瞬間、要塞の全身に装備された展開装甲が完全に弾け、背部のスラスターと肩部のスラスターがまるで桃色の翼のように周囲に高密度のエネルギーを撒き散らした。

外見的には装甲に亀裂が走り、そこからエネルギーが漏れているようにしか見えないかもしれないが、装甲という殻邪魔なものを取っ払った要塞の機動力と戦闘能力は、通常時のおよそ50倍。その分、防御力は通常時に比べて遙かに劣るが、それを補って余りある形態モードだ。

そして、この状態でだけ使える武装がある。俺の追加展開装甲の中で、最強の威力を誇る近接格闘武器。その名も、

「出てこい！ グロスヴェルヴァ！」

漆黒の装甲に桃色のエネルギーを走らせた究極装備、それがこのグロスヴェルヴァだ。

普段だったら俺がこれを使うことはそうそうない。最初の頃は姉上と模擬戦闘訓練をする時必ず使っていたが、国家代表としての実

力がついた頃からは一切使わなくなっていた。

俺の姉上は第一回モンドグロッソ大会において第二位。射撃部門で一位を獲得し、ヴァルキリーの称号を得ている。しかも、第二回大会では途中で織斑先生が棄権したものの、前回の織斑先生以上の実力を見せつけて格闘、射撃部門で一位を獲得している。

そこで、最近俺の方が姉上の実力を上回っている。それがどういふことが。

「ボーデヴィツヒ！俺がお前の悪夢を終わらせてやるよ！」

現時点で、俺が世界最強だということだ（まあ、今織斑先生とやり合っても勝てる気がしないけど）。

俺は瞬間加速を使いボーデヴィツヒとの距離を一気に詰める。その瞬間、ボーデヴィツヒは俺に向かって神速の居合切りをしてきたが、俺はそれをグロスヴェルヴァで弾き返す。

大きく体勢を崩したボーデヴィツヒに俺は追い打ちをかける。

体は自然体で剣を構え、素早い踏み込みと共に下から決るように切り裂く。間髪いれずに剣を反転させ、横に大きく一閃。

それが、姉上直伝の刀剣奥義、フェイタル・エッジ神光・絶閃だ。

シュヴァルツェア・レーゲンの装甲に大きく亀裂が走り、そこから眼帯の取れたボーデヴィツヒの瞳と目が合う。片方が緋色でもう片方が金色の瞳は、ひどく弱っていて何か縋るものを探しているようにも見えた。

ボーデヴィツヒのISは装甲が剥がれて待機状態へと戻っていた。俺はそのまま重力に従って地面に激突する寸前だったボーデヴィツヒを抱きとめ、そのまま下に降りる。

（ま、今は無理でもそのうちみんなと仲良くなってくればいいかな）

気を失ったままのボーデヴィツヒは、氷のような冷たい雰囲気をもとっているわけでも全てを受け入れないような硬い人間でも無く、普通の女の子だった。

「お、気がついたな」

「う……あ……？」

両目に暖かい光を感じて目を開けると、そこにはファルクフェルトがいた。どうして彼がここにいるのか分からずに、少し身構えてしまう。

だが、私の体にいくつも包帯が巻かれているのに気付き、そこでようやく彼が私をここまで運んでくれたのだと思い至ることが出来た。

「私は……」

「全身に無理な負荷がかかったことによる打撲といくつか軽傷がある。日常生活にはそこまで影響はないと思うけど、あんまり動き回るなよ？」

ファルクフェルトは私が聞きたいことをはぐらかすように私の体の状態を話し始める。だが、私が聞きたいのはそんなことではない。

「一体、何が起きたのだ？ 私は……」

「……一応機密事項だから黙ってるように織斑先生に言われてるんだけど、それでも聞く？」

私は彼の言葉にそのまま首を縦に振る。すると、彼は少し困ったような顔をしながら話し始めた。

「VTシステムは知ってるな？ それがお前のISに積まれていたんだ。誰が何のために積んだのかは分かってないけど、近くドイツ軍に委員会からの捜査が入るだろ」

彼は淡々と話しているが、それは本心ではないだろう。それに、ハーゼ隊にもオーストリアから潜入捜査をしている隊員が一人いる。おそらく彼が送り込んだものだろう。

「私が……望んだからか……」

教官になることを。いや、教官のような強い人になりたいと。

「ボーデヴィツヒ、お前は誰だ？」

「え……？」

彼の突然の質問に意味が分からず、とっさに聞き返してしまう。

いや、意味なら分かっている。彼がどういう意図でそう聞いてきているかも、なんとなく。

けれど……。

「私は……」

とつさに返事が出来ずに、彼と目を合わせていられずに顔を伏せてしまう。そんなことをしたって意味はないと分かつてはいるが、顔を上げることが出来ない。

（彼は自分自身が何者であるかを理解している。他の者も、みんな、私とは違う……）

「自分が何者かも分からないなら、これから探してけばいいんじゃないか？」

「え？」

「俺だって自分がどんな人間なのかなんて分からないよ。けど、分からないって言って歩みを止めたならそれまでになっちゃうだろ？ だったら、道なんて見えなくてもとりあえず前に進んでみればいいさ」

そうか、そうだったのか。みんな先なんて見えてないんだ。誰かに縋って歩いてるだけじゃ、先なんて見えないんだ。

そう思ったら、なんだか気が楽になった。

「……もし」

「ん？」

「もし、私が一緒に歩いてくれと言ったら、お前は私と一緒に歩んでくれるか？」

はつきり言って、これもある種の縋りだ。このままじゃ何も変わ

らない。

「だけど、彼なら私を変えてくれるかもしれない。たとえ継ぐことしかできなくても、その中で自分自身を見つけられるなら。」

「おう。協力は惜しまないぜ」

もしかしたら、これが恋なのかもしれない……。そんなことを、不意に思った。

2 - 6 (後書き)

はい、こんにちは。

…… あつ、やめて！ 岩を投げないで！ 人間の体ってそんなに丈夫じゃないから！

まあ、冗談はさておき。

今回、ラウラがデレました。脈絡？ 何それ？ 食えるの？

脈絡を完全に無視して一夏に立つはずのフラグを強奪し、完璧に自分のものにしました。のくせに、本人の自覚は一切無しという一夏と同じく天然フラグメイカー。まあ、一夏と違うのはちゃんと実力が伴っているあたりでしょうか。

次回、一夏にもシャルロットの女装がバレます。(嘘だけど)

今日のレイスの一言。

「帰って寝る。今日は疲れた」

2・7（前書き）

今回はいつもと比べると若干長いです。

『トーナメントは事故により中止となりました。ただし、今後の個人データ指標と関係するため、全ての一回戦は行います。場所と日時の変更は、各自個人端末で確認の上——』

ピ、と誰かが学食のテレビを消す。俺はピリ辛タンメン、デユノアはきつねうどん、一夏は海鮮塩ラーメンを食いながらいつまでも食堂でだらだらしている。

「大体デユノアの予想通りになったな」

「そうだね。あ、レイス、七味取って」

「ほい」

「ありがと」

当事者なのにやたらとのんびりしてると言われそうだが、ついさつきまで俺たちは教師陣から事情聴取を受けていたため（俺はISの無断使用でやたらと時間がかかった）、解放された時にはもうすぐ食堂のおばさんたちが帰る時間だった。

慌てて食堂に行くと、なぜか女子が団体でお待ちしていたが、俺たちはとりあえず夕食優先という事でテーブルに着いた——で、さっきの番組に繋がる。

で、俺たちの食事が終わるのを今か今かと待ちわびていた女子——堂は、番組が終わると同時に泣いて走り去っていった。

「一体何なんだ？」

「さあ？」

一夏とデュノアは理由が分からないようだが、俺には大体の事情は分かっている。

大方、学年別トーナメントで優勝したら一夏と付き合える権利を貰える——という話を真に受けた女子一同だったんだろう。この唐変木がそんなことに同意するはず無いのに。

「……………ん？」

女子の走り去った後にはたった一人だけ残っていた。あれは……篠ノ之か？　そこまで視力が良いわけじゃないからよく見えないけど（コンタクトを外してるから）、あの特徴的な馬の尻尾は篠ノ之以外に知らない。

「一夏」

「ん？　……………お、おお」

俺は篠ノ之を顎で示して一夏に側に行かせる。

俺とデュノアも食器を返却しながら一夏と篠ノ之の側に行く。

「そう言えば筈、先月の約束だが——」
「ぴくっ」

「ぴくっ」っていう擬音語口で発する人を初めて見た。

「付き合っても良いぞ」

「——。——、なに？」

「だから、付き合っても良いっつぐおわっ！」

突然バネのような動きを見せた篠ノ之は一夏の首を勢いよく締め

上げていた。よし、そのまま落とすんだ。そしたら俺は霊柩車を呼んでやる。

「ほ、ほ、本当、か？ 本当に、本当に、本当なのだな！？」

「お、おう」

篠ノ之。一夏にあまり期待するな。多分こいつは今お前が考えている事と別のことを考えている。

「な、なぜだ？ り、理由を聞こうではないか……」

「そりゃ、幼馴染の頼みだからな。付き合うさ」

「そ、そうか！」

はい、一夏の唐変木なセリフまであと5行。

「——買い物くらい」

「このたわけがっ！！！！」

「ぐぼらっ！」

ズドッ！ という小気味いい音と共に一夏の顔面に篠ノ之の拳が突き刺さる。

…………… 自業自得だ。

「ふんっ！」

篠ノ之は一夏の鳩尾に蹴りを一発。そのまま食堂から出て行った。

「……俺が……なにをした……！」

「いやあ、あれはお前のせいだろ。誰がどう見ても」

「……女の敵」

デュノアの呟きは聞かなかった事にしよう。まあ、これでデュノアの中でも一夏の株は大暴落でドル安でスーパーインフレ状態になるだろう。第一次大戦後のドイツのように。

そう言えば、篠ノ之ってこいつと幼馴染なんだな。鳳もオルコツトもこいつのこと好いてるみたいだし、モテはするみたいだな。

とりあえず一夏の食った分の食器も片付けて、一夏が復活してから俺たちは食堂を出た。

その後、デュノアは一夏と視線すら合わせようとはしなかった。

「大浴場？」

「はい。今日から一週間のうち二日間、男子であるみなさんも大浴場の使用が可能です」

夕食を終えて部屋に戻ろうとしていた俺たち男子一同は、山田先

生にそんなことを言われていた。

「マジですか!？」

「マジです」

「何がそんなに嬉しいんだ？」

「さあ？」

やたらテンションの高い一夏と対照的な俺とデユノア。大浴場が使えることの何が嬉しいんだ？

「レイス！ シャルル！ 大浴場が使えるってよ！」

「俺たちもここにいるんだから耳に入ってないわけ無いだろ。で、何がそんなに嬉しいんだ？」

はっきり言っただけ俺たちは部屋のユニットバスが使えればそれでいいんだけど。そこまで解放感求めてないし。

けど、それを聞いた一夏はやたらと興奮して、

「だって大浴場だぜ!？ 風呂はでかいほうがいいじゃんか！」

「理解しかねる」

「僕もそこまでは……」

意見は1対2。ここらへんが日本と欧州、欧米の文化の違いだ。向こうには温泉施設なんてないから、風呂は大きいほうがいいという日本人の気持ちが見えない。

そもそも風呂が大きいことに何か得があるのだろうか。掃除は面倒だし、湯の張り替えをするとかなり水道代やガス代、光熱

費がかかる。俺は6歳のころから一般庶民の家に預けられて育ってきたからその辺は結構厳しい。

「銭湯とかでもそうだけど、風呂上がりに飲む牛乳は格別だよなあ」
「それは私も分かります。私も学生の際はお風呂上がりに毎日牛乳を飲んでましたから」

一夏のセリフに山田先生が便乗し、そこから風呂談義が始まる。

……なるほど。だからこうなったのか。

「レイス、目つきがいやらしいよ」
「はっはっは。何を言ってるんだいデュノア。俺がそんな不埒なマネをするはずがないじゃないか」
「だったらこっちを見なよ」

俺の視線は山田先生のある一点に注目している。……むう、93
か……。

「Gだな」
「レイスってムツツリ？」
「失礼な。俺はムツツリなんかじゃない。ただのスケベだ」
「……オープンでセクハラできるレイスに軽く感動を覚えるよ」

デュノアが俺に侮蔑とよく分からない感情の混じった視線を向けてくる。ああ、デュノアって女子だったっけ。このことを知ってるのが俺だけで、しかも俺はそういうことを全然気にしないからすっかり忘れてた。

しかも男装してる時のコイツってどこからどう見ても（俺とは違

うタイプの)美少年だから、言われない限り誰も気づかないだろう。

「まあ、日本文化に浸るのもいいだろ」

「えっと……僕はちよつと遠慮したいかな……」

「別に無理する必要はないだろ。入りたいって言うなら俺と一夏が出た後にちやちやつと入れればいいだろうし」

いくら男装してるとは言えコイツは女子だ。おれはともかく、そこまで気心の知れてない一夏と混浴はかなり嫌だろう。

それに、男装してるという事実が出来れば隠しておきたいだろうし。

「じゃあ早速——」

「待て、織斑」

行こうぜ、と言おうとした一夏を呼び止める人がいた。何を隠そう、我らが担任織斑先生である。

「な、なんだよ千冬ね——」

スパ—ンツ！

「織斑先生と呼べ」

「……はい」

おお、女尊男非の構図がこんなところにまで。

「お前に客が来ている。付いてこい」

「え？ 今？」

「付いてこいと言っている」

一夏は問答無用で織斑先生に引きずられていく。ここでドナドナでも流したい気分だ。笑えるから。

「えっと……どうしようか？」

「……とりあえず、大浴場行ってみるか」

「で、なんでお前まで入ってるんだ？」

「えっと……気分？」

大浴場に着いて、服を脱いで、無駄に広い風呂に入った。それはいい。

なのに、何故かデュノアと一緒に風呂に入っていると言うカオスな状況。

「だ、ダメ、かな？」

「俺は別に気にしないけど……」

ジュニアハイスクールを卒業するまで、やたらと一緒に風呂に入りがる幼馴染の世話をしていたためそこまで女子の裸に抵抗は無い。

ただ、普段から男子のように振舞っているデュノアに突然こういうことをされると、正直対応に困る。

「め、迷惑なら上がるよ？」

「いや、別に良いんじゃないか？」

「え？」

「デュノアが俺に対して迷惑なことをしてると思うなら上がればいいし、そうじゃないなら別に良いんじゃないか、混浴でも。それに、俺は迷惑だなんて思っただけだぞ」

「……レイスって、そういうところ優しいよね」

「ん？」

「なんでもない。えへへ」

なんだかデュノアの機嫌が良くなったみたいだ。

「……あ、あのね、レイス」

「ん？」

「ちよつと……大事な話があるんだ」

俺はなるべくデュノアのほうを見ないようにしながらデュノアの話に耳を傾ける。女子の裸に抵抗が無いとはいえ、俺も普通の男子高校生なのだ。性的な興奮は置いといて、ドキドキする。

「僕ね、ここに残ろうと思う」

「残るっていうと、IS学園にか？」

「うん。それもそうだけど……ううん。今はいいや」

なぜか語尾を濁して、そのまま会話が止まる。

静寂。風呂場に響くのは、天井の水滴が湯船に落ちる音だけ。

「……レイス、前に言ったよね。『お前をかばうことで俺まで罪に問われるんなら、俺はこの世界を捨てる。そして、お前のためだけに戦ってやる。それで、お前が二度と苦しまなくていい世界を作っ

てやる』って」

「ああ、そんな事も言っただけな……」

あの時は悲しそうな顔をして笑ってるデュノアを見て、それが許せなくてそう言っただよな。まあ、言っただ言葉に嘘はないけど。

「だからね、僕、レイスの側で生きていこうって決めたんだ。それで、僕も僕自身を見つけれたらいいなって、そう思ったんだ」

「デュノア……」

「シャルロット」

俺が名前を呼ぶと同時に、デュノアが誰かの名前を出した。もしかすると、それは――

「それが、お母さんがくれた、僕の本当の名前」

「シャルロット……か……」

「うん。だから、レイスにもそう呼んで欲しい。ううん。レイスだからこそ、そう呼んで欲しいんだ」

デュノア――いや、シャルロットは、俺の目を真っ直ぐに見てそう言った。

「分かった。シャルロット」

「うん。えへへ……」

シャルロットは心底嬉しそうな様子で笑みを浮かべた。まあ、それも分らない事は無い。

大分前にシャルロットにだけは話したが、俺が相手をファーストネームで呼ぶことはそうそう無い。一夏のことは名前で呼ぶが、そ

れは織斑先生がいるからだ。もし俺が一夏のことを「織斑」と呼ぶと、織斑先生との違いが分からなくなってしまう。

俺が人の前をファーストネームで呼ぶのは、その人が俺にとって信頼するに値する人であるときだけだ。裏を返せば、俺が人の名前をファミリーネームで呼ぶときはその人の事を心のそこでは信頼して無いということになる。

まあ、すぐに死ぬような仲間ならいない方がマシだし。

でも、シャルロット、か……。

意外と可愛い名前してんだな。なぜか、そう思った。

2・7（後書き）

ちよっと思ったんですけど、ここからセシリアのフラグまでも一夏から強奪したらどうなるかな——みたいなことを考えてます。それについて何か意見があったらどうぞ。

ちなみに、本編の3巻にあたる部分から新キャラが出てくる予定です。そこで、そちらについても何か意見等ありましたらご自由にどうぞ。以上です。元号四年でした！。

2 - 8 (前書き)

新キャラが登場します。で、今回が本編の二巻の最後です。

翌日。俺は一人で教室に着き、SHRが始まるまでの間に姉上から届いたISの設計書を眺めていた。

シャルロットは今朝になって突然体調が悪いと言い出し、それに伴ってか顔色もそこまで優れないようだったから部屋に置いてきたが、あまりにも体調が悪いようなら付き添っていた方が良かったかもしれないと今になって思い至った。

（でもあいつもそこまで意地っ張りな方じゃないし、本当にダメならダメって言うか）

頭の中で勝手に整理をつけて俺は教室内を見渡す。

一夏は予習でもしているのか教科書片手にノートと向き合っている。篠ノ之は相変わらず窓の外を眺めていて、オルコットは少し眠そうにしている。

（そつえばボーデヴィツヒがいないな）

まあ、昨日の負傷もあるから部屋で療養中なんだろう。あとで見舞いにでも行ってやるか。どうせあいつの性格じゃその他の女子が来ても不躰な態度しか取れないだろうし。

「み、みなさん、おはようございます……」

山田先生が教室に入ってくるのを見て全員が席に着く。が、教室にいるクラスメイトの大多数はその山田先生の姿を見てギョツとし

ていた。

足元はおぼつかず、ふらふらとしている。織斑先生とのやり取りでもこうなっているのを見たことが無い。一体どんな精神攻撃を受けたのだろうか。山田先生って見た感じMだから多少のことじゃへこたれないと思うんだけど。

「今日は、ですね……皆さんに転校生を紹介します。転校生と言いますか、純粋な転校生が一人と既に紹介の済んでいる人が一人と……」

また転校生か？ ついこの間俺とシャルロット、ボーデヴィツヒが編入してきたばかりなのにか？

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

「はい」

……ん？ 両方とも聞き覚えのある声だが……。

「シャルロット・デュノアです。改めてよろしく申し上げます」

そう言っつてシャルロットが頭を下げる。ふわりとしたスカートがその拍子に若干めくれて、真っ白な肌の脚線美が如何ともし難い――

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした、ということです。はああ……また量の部屋割りを組み立てなおす作業が始まります……」

山田先生が落胆しているが、俺はいつかシャルロットが男装をばらすと分かっていたからそこまで驚かない。

ノエルは俯いて、腹の底から空気を搾り出すように息を吐いた後、
「殿下が望めば私は身も心も投げ出す所存ですのに！」

そう叫んで、ノエルは俺に54口径のアサルトライフル、ジギウ
イックM-54を俺に突き付けて引き金を引いた。

正直、今からISを展開しても間に合いそうに無い。俺は来るベ
き衝撃と死への階段を見据えながら強く目をつぶり――

「……………」

いつまでも衝撃がこないからゆっくりと目を開くと、空中で銃弾
が止まっていた。間髪だったかどうかは分からないが、俺とノエ
ルの間に割って入ったのはまさかのボーデヴィツヒだった。

「助かった。悪いな」

「い、いや、礼には及ばん……」

「そうか。なんにせよ、助けてくれてありが――」

そこまで言いかけて、俺はいきなりボーデヴィツヒにキスをされ
た。

「……………は？」

「お、お前は私の嫁にする！ 決定事項だ！ 異論は認めん！」

「は、なっ、嫁って、ええっ！？」

混乱のあまり呂律が回らなくなる。俺がここまで混乱するのはか

なり珍しいぞ。他の人間のなかで冷静な奴が一人でもいればそのネタで俺を脅迫できたかもしれない。そのぐらいの混乱だ。

「に、日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする！」

「そもそも俺日本人ですらねえぞ!？」

大変だ。これはボーデヴィツヒも相当テンパっているらしい。

「ねえレイス？」

そんな中、一人だけ微笑みのまま態度を崩さない女子が一人。

「な、なんでしょうか、シャルロットさん？」

「レイスって他の女の子の前で堂々とキスするんだね。僕、びっくりしちゃったよ」

「いや、まて、俺は悪くない」

「そうだね」

ニコニコ。笑みを崩さないシャルロットが有り得ないくらい怖い。

「レイス」

「……はい」

「覚悟はいい？」

「……はい？」

シャルロットは既にISを展開している。左腕の盾も同様にパージされていて、そこから69口径パイルバンカー、《灰色の鱗殻グレー・スケイル》が。

「ちょ、ま、流石にそれはやばいって！」

「大丈夫」

シャルロットは天使のような——女神のような微笑みのまま一言。

「せめて苦しまないように葬^しってあげるから」

その後、クラスで三体のISが飛び回る音と絶え間ない轟音が校舎内に響いていった。

2 - 8 (後書き)

新キャラ設定

ノエル「L」フェンリス 15歳 女

162cm 44kg O型

レイスの世話焼き係でメイド。オーストリアの代表候補生。

とりあえずこれだけ分かっておいてもらえればいいと思います。後は随時更新していく方針で。 後

次から3巻に入ります。

やってみたいこと

本編のほうは現在急ピッチですすめております。今しばらくお待ちください。

で、短編をアップしようと思うのですが、今僕の中で考えているアイデアの中で、これだったら読んでみたいというものがありません。どんな形でもいいのでご報告ください。

- 1・シャルロット、勝負下着を買う　の巻
- 2・レイスがもしたただのバカでヘンタイだったら　の巻
- 3・レイスの姉、千冬の意外な関係　の巻
- 4・鈴とレイス、二人の意外な共通点　の巻
- 5・ラウラ、秋葉原へ進出　の巻
- 6・亡国企業、スコールの知られざる過去　の巻
- 7・これは本当にISか！？　突然の襲来、ゴーレム？！　の巻
- 8・愛があれば大丈夫！　彼のためならどんな格好でも「ってやりぱり恥ずかしいよ！」（シャルロット）「の巻

以上です。何か意見などありましたらご自由にどうぞ。

本当のプロローグ（前書き）

新章です。

本当のプロローグ

「レイソニアⅡAⅡファルクフェルト」

オーストリア王宮、謁見の間。その閉塞された空間に、女性の凜とした声が響いた。

「あなたに大事な任を与え、日本へと送ります」

オーストリアの現国王の妻であり、女王のジルヴィアⅡSⅡファルクフェルトは、小さく息を吸って、その言葉を口にした。

「篠ノ之束の拘束。もしそれが難しいならば、妹である篠ノ之箒、親友の織斑千冬、また、その弟の織斑一夏を拘束しなさい。それも難しいなら、最悪殺しても構いません」

篠ノ之束の拘束。それは世界中で執り行われていることだが、オーストリアにはレイスの情報網で、篠ノ之束が亡国機業に加担しているという事実が浮き彫りになっていた。

「分かりました、母上」

レイスはそれだけ言うと、謁見の間を後にした。

それは、ほんの一月前の出来事。

そして、オーストリアが亡国機業ではなく、日本、イギリス、中
国と戦争を始める、たった一週間前のことだった。

3 - 1 買い物編 上（前書き）

ようやく始まりました。本編三巻です。

なぜこんなに遅れたかと言うと、実は夏休み中とある病気で手術することになり入院。それで二週間ぐらい潰れ、そのほかはバイトや資格試験などで潰れたため、結局夏休み中ほとんどパソコンに向かうことができませんでした。

まあ、それはともかく。本編スタートです。

3 - 1 買い物編 上

朝。いつもと変わらぬ気だるい感じに頭を支配されながらも体を起こし、ベッドの近くにあるかなり大きめのカーテンを開け放つ。カーテンの隙間から洩れていただけの光はそれだけで部屋いっぱいになり、広がり、破壊的な光の洪水に思わず目を細める。

いつもと変わらぬ朝。違うところがあるとすれば――

「……………」

ルームメイトがいなくなったことだ。

先日までいたシャルロットは、自分が女であることを明かしたのために、部屋割りを変えるためという名目でこの部屋から出て行った。万年低血圧の俺からしたら、自分より早く起きて俺のことを起こしてくれるシャルロットの存在はとてもしいものだったが、あれから一人で起きないとはなくなった。

しかも、俺には「種類を問わず、紅茶を飲むと急にとてつもない眠気が襲ってくる」というとんでもない欠点がある。そのせいで、昨日もぶっ倒れて三時くらいまで床の上で寝ていた。

（愚痴っていても仕方ないか……）

そう思い直し、窓を開けて気分を入れ替える。今日もいい天気だ。

その日、俺は究極の選択を迫られることになる。

「え！？ レイス、オーストリアに帰っちゃうの！？」

いつものように食堂に向いていつもの朝食——トーストとスクランブルエッグ、海鮮サラダとブラックのコーヒーといういたって普通の朝食を食べていると、シャルロットが俺の座っていたテーブルに寄ってきて、何の気なしに話をしていると突然そう叫ばれた。

「いや、帰るって言っても夏休み始まっただけだな。新しく作ったISの試験稼働とかもしないといけないし、七月の終わり頃に帰って、日本に戻ってくるのは八月の終わり頃になると思う」

「そっか……レイスはオーストリアの国家代表だもんね……」

「まあ、こっちで言う『盆休み』には一回戻ってくるつもりだけど」

俺は本国でISを作る際、全ての立案と設計を任されているため、俺がいないとオーストリアのIS開発は遅々として進まない。それでも本国の人間が俺をIS学園に送ることにしたのは、これ以上IS開発が進むと外交問題やその他諸々の厄介事に発展する可能性があるためだ。

俺が使うIS、難攻不落の要塞、通称要塞は、既に時代の先の先を行く第五世代型だ。俺がこれを世界に公表したのは丁度五月の頭ぐらいだったから、それまでIS開発の最先端と言われていたイギリス、中国、ドイツあたりの関連企業は大打撃を受けていた。

まあ、現在第五世代型は俺の要塞を含めて三機（うち二機は試験稼働中）で、そこまで開発も進んでいないのが現状なのだが。

「そっだシャルロット、お前この後暇か？」

「え？ 暇…… けど？」

俺の何の脈絡もない話の展開のさせかたにシャルロットが困惑した表情を浮かべる。

「俺さ、水着とか一切持つてないから買い行かないといけないと思っててるんだけどさ、一人で行くのもつまらないし誰か一緒に来てくれたらなー、なんて思ってたりもするわけよ」

「ああ、そういうことね……」

シャルロットがなぜか「ああ、どうせそんな事だろうと思ったよ」とでも言いたそうな顔をする。

…… なんでだ？

「でも、そういうことならノエルに頼めばいいんじゃない？ わざわざ僕に頼まなくても」

シャルロットの言葉を途中で遮るように声をかぶせる。

「馬鹿言うな。何が悲しくて好きでも無い奴と一緒に買い物なんか行かないとならないんだ」

「あう」

と、シャルロットは顔を真っ赤にして俯いてしまった。

…… なんでだ？

確かに、ノエルに頼めば大抵のことはやってくれる。正直言って性格はかなりうざったいが、業務や雑務は完璧にこなすし、あれで

も一応代表候補生だから話のネタは尽きない。

けど、あれはどちらかというところ「同年代の女の子」より、最早「手間はかかるし一緒にいると何かと面倒くさい妹」のような関係が確立してしまっているため、ノエルをそういう目で見れないのが現状だ。

多分、向こうの考え方も俺とほとんど同じなんだろうけど。

「じゃあ、二時間後に校門の前に集合な。俺、メールチェックとか色々やることあるから」

「う、うん。分かった」

シャルロットはそう言うと、真つ赤な顔のまま食器を片づけて食堂から出て行った。

「……俺、なんかしたか？」

「何やら面白い話をしていたようだな」

「んあ？」

突然聞こえた声に反応して顔をあげると、さっきまでシャルロットが座っていた場所にいつの間にかボーデヴィツヒが座っていた。……いつの間に。気配を一切感じなかった。

「して、何の話をしていたのだ？」

「別に。ただ、一緒に買い物に行こうって話をしていただけだ」

俺は包み隠さずありのままを話す。すると、ボーデヴィツヒはやや思案するような素振りを見せた後、ゆっくりと口を開いた。

「買い物か……私も同行していいか？」

「それは構わないけど……お前がショッピングに興味を示すなんて意外だな」

「馬鹿を言っな。私とてこれでも一応女なのだぞ」

意外すぎる。軍事関連以外一切興味のなさそうなボーデヴィツヒが、「これでも一応女」だとか本当に意外だ。

「……そ、それに、クラリツサが女は攻めるべきだと……」

「あ？」

「い、いや、なんでもない。ともかく、私も同行する」

なんだか捨て台詞のようにそう言つと、ボーデヴィツヒはシャルロットと同じように食堂から出て行った。

3 - 1 買い物編 上（後書き）

意外と話が長くなりそうです。下手したら四話跨ぎぐらいになるかも。

まあ、飽きずに読んでもらえたら嬉しい限りです。

3 - 2 買い物編 中の上（前書き）

アニメを見ていてたまに思うんですけど、九話で一夏とシャルが買い物に行くシーン。一夏、上から下まで学生服完全装備ですけど、暑くないのかなって。

ここのシーンって、たしか七月頭のはずだから学生服完全装備だと確実に暑いと思うんですね。

だから、レイス達は全員薄着設定です（ラウラを除く）。

3 - 2 買い物編 中の上

それから二時間後。俺はシャルロットとボーデヴィツヒを待つために校門の前まで来ていた。

最初は普通に学生服で行こうと思ったが、流石に制服を上まで着るとかなり暑いため、下はES学園の制服、上は黒のタンクトップという見た目はかなりラフな格好になった。

普通の服をほとんど持っていなかったため一夏に借りようかとも思ったが、一夏と俺では服のサイズが違うため仕方なく断念した（一夏って女子の中にいるからそこそこでかく見えるけど、実際は170ちよつとしかない）。

「お待たせ」

「待たせたな」

——あ？
そうこうしていると、シャルロットとボーデヴィツヒがやってき

「よっ」

「私たちも一緒に一緒にさせて頂きますわ」

「ま、たまにはこういうのもいいわよね」

「……くそ……なんでこんなことに……」

なぜかこの学年の専用機持ちが一堂に会していた。

「最初は筈と一緒に買い物に行く予定だったんだけど、なんか鈴とセシリアも行きたいって言ってきたから、お前らも街に行くって

聞いたからついでに――」

「はぁ……」

一夏の言葉を最後まで聞かずに俺は思わずため息を漏らす。すると、一夏を忌々しげな眼で見ている篠ノ之と偶然目が合い、

「（篠ノ之も苦労するな……）」

「（まあ……一夏は鈍感なうえに唐変木だからな……）」

そんな風にアイコンタクトで通じ合ってしまう。身近に厄介な人間がいるが故の感情の共有に一瞬、篠ノ之が物凄く身近な存在に思えた。

「愚痴を言っても仕方ないか……。ほれ、さっさと行くぞ」

「あ、レイス」

「なんだ？」

「駅、逆方向だよ」

「……………」

今日は本当に厄日だ。それを、朝起きてから三時間で早々に悟った。

ここから三人称になります

学園前の駅からモノレールに乗って三十分ほど。レイス達は目的地の駅で降り、これからの予定について話し合っていた。

ただ、IS学園の生徒が七人も揃っていて、しかもその全員の容姿がかなり高い水準であるためにその場にいるありとあらゆる人々の視線を集めていた。

しかもIS学園の生徒で男子というのは、すなわち「世界でISを使える希少な男子」ということでもあり、レイスと一夏は特に注目を集めていた。

だが、周囲の人間の機微にかなり鈍感なレイスと一夏は、周囲のそんな様子になど一切気付くこと無く、レイスは「どうしたらこの面倒な状況から逃げ出せるかなー」と考えていた。

「それで、これからどうするんだ？ 水着を買いに行くのはいいけど、俺この辺の土地勘全然無いからどこ行けばいいか全く分かん」「たしか、一夏さんはこのあたりに実家があるのでしたよね？」「ああ。ここら辺は弾とよく来てたからな。案内は任せろ」

一夏は得意気に胸を張ってそう答える。

だが、それに茶々を入れるようなのも当然いるわけで、

「はっ。貴様にまともな道案内など出来るのか？」

ラウラは一夏を挑発するような口調で平然とそう言うてのけた。しかも、考えて口にしたような感じではなく、条件反射で勝手に出たという方が自然に感じられるような、そんな口調だった。

それに鈴が食ってかかる。

「何よ。あんただってこの辺りの土地勘無いでしょうが」

「はっ。何が土地勘だ笑わせる。これだから東亜の猿は」

「あんたあたしに喧嘩売ってんのね。そうなのね分かったわ。そんなに死にたいなら今すぐにでも――」

そこまで鈴が言いかけたところで、一夏が鈴の腕を、レースがラウラの肩を引っ張って互いの機先を制する。

だが、鈴もラウラも一旦昂った思いが収まらなかったのか、それぞれに向かって質問攻撃を始めた。

「何よ一夏！ あんなこと言われて悔しくないわけ！？」

「ちよつと落ち着けて。確かに腹は立つたけど、あんないつでもあるような事に一々腹立てても仕方ないだろ？ もう少し大人になれよ」

「大人になれですって！？ あんたのほうがよっぽど子供じゃない馬鹿一夏！」

「ああ、もう……」

鈴は元来怒りっぽい性格ではあるものの、普段はきちんと自制している。だが、ラウラの挑発に加えて一夏のふがない態度が鈴の自制心を大きく外してしまい、結果的に鈴が烈火のように怒るという状況になっていた。

一方レイスは、ラウラのことを上手く宥めていた。

（これはいつも通りにやっても火に油を注ぐだけだな。——よし）

「逃げるつもりかこの腰抜けども。やはり、貴様らは所詮群れることでしか自分の居場所を見出せないただの猿だったと——」

と、ラウラが言いかけた直後、いきなりレイスがラウラを後ろから抱きしめた。

「なつ、なにw * # ¥ & \$ > □ ! ?」

ラウラはこの言葉がまるで分らないような意味不明な言葉を発すると、頭から湯気が噴き出そうな勢いで顔を真っ赤にして黙り込んだ。

レイスはそれを見逃さずに畳みかける。

「つたく、悪い猫だな」

レイスは子供に接するような優しい顔と声でラウラに語りかける。だが、その顔はどこか悪戯を思いついた子供のようでもあり、一瞬にしてすべてを察したシャルロットは「またやってるよ……」と言いたげな顔でレイスを見ていた。

レイスはラウラの体をくるりと反転させて自分の方に向かせると、ラウラの顎をくいと上げて、自分も顔を肌と肌が触れるぐらい近くまで近づけた。

「あんなに悪いことを言うのはこの口か？ なら、いっそのこと、お前がこの前俺にやった時みたいに塞いでやるよ」

そう言つてさらに顔を近づけ、本当に唇が触れるかもしれないくらい近づいた瞬間、とうとう耐えきれなくなったのかラウラの思考回路がショートし、後ろに仰け反つてそのまま動かなくなった。

「ふう。これで少しは大人しくなるだろ」

レイスはラウラを近くのベンチに寝かせると、まだギャーギャーとやっていた鈴と一夏の側に寄っていき、

「じゃあ、こっから別行動な」

そう言った。それにシャルロットを除く全員が、

『は?』

と、何を言われたのかまるで分からないように素っ頓狂な声で聞き返した。

だが、鈴や一夏よりは落ち着いていたセシリアと箒はすぐに、「ああ、なるほど」というような納得した表情で頷いた。

「何でだよ。目的は同じなんだから一緒に行ったほうが――」

「本当に良いとも思ってるのか?」

レイスは一夏の言葉を途中で遮ってこう言う。

「このメンバーで行けば、必ずボーデヴィツヒと誰かが喧嘩になる。そうなったときに宥めるのは確実に俺たちだ。俺はそんな役を一切引き受けるのはごめんだ。」

それに、これはある意味折衷案だ。俺が面倒を半分引き受けてやるから後の半分はお前が対処しろ」

レイスはそう言うと、ベンチに寝かせてあったラウラを抱き上げ、一夏たちの返事を聞かないままにその場を後にした。

3 - 2 買い物編 中の上（後書き）

登場ヒロインの一番似合うと思える格好（作者の独断と偏見）。

第

青地に牡丹などの花が描かれた着物 全体的に赤いもの

鈴（初期設定だと鈴の髪は黒いはずなのになぜか茶髪）

ノースリーブのシャツに前が開くタイプのパーカー ミニスカート
とニーソックス。

セシリア

濃い青のワンピース。多分白は似合わない。

シャルロット

競泳水着（俺の趣味）、裸ワイシャツ（崩したネクタイ付き）、メ
イド服

なんか趣味全開になった。

ラウラ

あえて子供服（ギャップ萌）、猫耳メイド

3 - 3 買い物編 中（前書き）

これから一人称と三人称を織り交ぜて行こうと思います。

3 - 3 買い物編 中

その後、一夏たちと別行動をすることになったレース達は、駅前のショッピングモールとは逆方向にある繁華街のほうへと来ていた。

駅前の通りほどでは無いにしろかなり開発の進んだ地域であることは間違いなく、レース達の他にも数人のIS学園の生徒と思しき女子がショッピングを楽しんでいる。

「……で、どこに行けばいいんだ？」

「この近くに水着とかも置いてある服屋があるはずだけど……見つからないね」

レースとシャルロットは辺りをきょろきょろと見回しながら目的の服屋を探す。だが、探しても一向に見つかる様子は無く、時間だけが過ぎて行く。

すると、先程まで先刻のレースの行為を思い出し、顔を真っ赤にしてシャルロットが近くの自販機で買ってきたアイスココアをちびちびと飲んでいたラウラが、

「あれではないか？」

と、一軒の店を指さした。

そこには、「夏物フェア開催中！」という登り旗の出た店が立っていて、それにレースとシャルロットが、「ラウラが見つけた……」と言いたげな顔で見ていた。

店内は外観よりも広く、中には女性のほかにも男性が数人見られ、それぞれが楽しそうに服選びをしていた。

「結構あるな……これだけあれば、俺のサイズもあるか……？」

レイスの身長は外人としては平均サイズではあるものの182cmあり、日本のサイズだと大体3Lか4Lを着ている。しかも、レイスは他の人と比べて腕がかなり長いため、普通のサイズでは合わないことが多いのだ。

（まあ、別に今日じゃなくてもいいか）

今度来たら何か買っていこうと思い、レイスはシャルロット達にいる水着売り場へと向かった。

「あ、レイス」

「む」

「買うものは決まったか？」

そう言いながらレイスは二人の手元を見る。だが、シャルロットもラウラもその手には何も持つてはおらず、まだ何も選んでいないというのがはつきりと見て取れた。

「ねえ、レイスはどんな水着が好き？」

と、シャルロットが頬を赤らめて聞いてくるのに対し、レイスは毅然とした表情で

「スク水か競泳水着」

と即答した。それに対しシャルロットが「え？」と聞き返す。

「え、そ、それって本当なの？」

「こんなことで嘘ついて俺に何の得があるんだ」

レイスはシャルロットがなにを驚いているのか全く分からないと言いたげな表情のまま腕組みをする。それにシャルロットは、「そうだった……レイスって変態だった……」と小さく漏らす。

「シャルロットも競泳水着とか絶対に似合うと思うんだけどな……」

「ぼ、僕！？ 嫌だよそんなの！ 断固拒否！」

「ラウラは……どっちかって言うて旧型のスク水のほうが似合いそうだな」

「お、お前がそれが良いと言ったたら……」

「駄目だよラウラ！ レイスに乗せられちゃ駄目！」

シャルロットが大声を張り上げて慌てふためく。その姿を見てレイスは、「いやぁ……楽しいなぁ」と密かに思う。

すると、シャルロットは何を想像したのかいきなり顔を真っ赤にして、顔を覆ってその場にうずくまってしまった。

「シャルロット」

「レイスの馬鹿……もう知らない」

「怒らせてしまったようだな」

「俺のせいだよ……」

レイスは一つため息をつく、シャルロットの側にしゃがみ込ん

で、

「Trop d'agréable accepter; charlotte. Mais c'est un fait pour avoir voulu regarder le chiffre que vous aimez」

そう耳打ちした。するとシャルロットは、

「な、なら許してあげる……」

と、頬を赤らめたまま返した。

「なんと言ったのだ？」

ラウラはレイスが発した言葉の意味が分からなかったようで小首をかしげる。それもそのはず。レイスが口にしたのはシャルロットの母国語であるフランス語で、ドイツ人であるラウラには分かるはずもない。

レイスはオーストリアの王子としての責務を果たすために、幼少期から自らの意志で様々な国の言語を学んでいた。今ではオーストリア人の九割以上が母国語として使うドイツ語のほかに、日本語や英語はもちろん、中国語に韓国語、ロシア語にフランス語、スペイン語にポルトガル語、果てにはラテン語まで自在に操るという秀才ぶりを発揮している。

ラウラの質問に対しレイスは、

「シャルロットの可愛いところが見たかったからだよ、って言った

んだ」

そう何の気無しに答える。すると、それを聞いたラウラの表情は目に見えて不機嫌になり、

「ふん。やはり貴様もシャルロットか。私のことは名前では呼んでくれぬのに、シャルロットだけはちゃんと名前で呼んで……」

ラウラは最後のほうは声を小さくして拗ねるような口調で言ったが、レイスの耳には普通に入ってしまったようで、納得したようにレイスは大きく頷いた。

「俺は、ラウラのこと可愛いと思ってるぞ」

「——！？」

突然の予期せぬ出来事にラウラの頭が一瞬にしてオーバーヒートを起こす。レイスはそんな様子のラウラを見て、言葉を途切れさせること無く続ける。

「そんな風に拗ねた顔も、怒って頬を膨らませてるのも、恥ずかしそうに顔を真っ赤にさせてるのも全部可愛いと思う」

「あ……あう……」

ラウラはレイスに顔を見られたくないのか、小さな手ををめいっぱいに使って顔を隠す。だが、自分の気持ちを偽らないレイスにとっては、ラウラのそんな行動もすべてラウラの可愛さを助長させるようなものでしかなく、素直に相手のことを褒めちぎる、ある意味言葉攻めを連発していた。

「わ、私は……」

「ん？」

「わ、私は……可愛いと言われると……」

レイスが聞き取れたのはそこまで。その後、ラウラは「うわああああああ………」と叫びながらその場から走り去って行ってしまった。

「……なんなんだ、一体」

レイスが発したその疑問に答えてくれる人はいなかった。

3 - 4 買い物編 下（前書き）

今回は短いです。

3 - 4 買い物編 下

それから二時間、買い物を終えた俺たちはIS学園へと戻ってきた。

シャルロットは自分で選んだらしいが、ラウラは結局最後まで自分で決めることが出来ず、シャルロットと一緒に決めてもらった。俺が選んでやつてもよかったのだが、俺の好みでやると確実に変な方向性になるとシャルロットに言われたため断念した。

「じゃあ、僕たちは部屋に戻るね」

「おう。また明日な」

シャルロットはそう言ってラウラを引っ張っていった。

「……さて」

二人の姿が見えなくなったのを確認して、俺は自分の首元で待機状態になっている要塞に手を添え、プライベート・チャンネル秘匿回線の機能だけをオンにする。目的の相手には、かなり距離が離れているはずだが二秒ほどでつながった。

「俺だ。現状を報告しろ」

『はい』

秘匿回線から聞こえてきたのは少し低めの女の声で、その声はどことなく沈んでいるようにも感じられる。

さっき買い物中に一度ケータイにメールが入り、そこには暗号化

された文章で、『緊急事態発生。至急指示を仰ぐ』と書かれていた。発信先が本国だったから、結構まずい状態になっているのは間違いない。

『先程、何者かによってシステムへのハッキングを受けました』

「被害状況は？」

『メインシステムへの被害はゼロ。ほぼ全てのデータが無事でしたが、一つ問題が』

「なんだ」

『現在開発中の『断罪の十字架』ジャッジメント・クロス および『終焉を喰らう者』ランド・ディザスター のデー

タが侵入者に閲覧された形跡がありました。幸いデータの欠損などの被害はありませんでしたが、技術を盗まれた可能性があります』

『断罪の十字架』と『終焉を喰らう者』は、俺が設計、開発をした第五世代型ISだ。要塞を作ったのが一年ほど前で、そこから試行錯誤を重ねた結果に作り出した現状での最高性能の機体。追加展開装甲のほかにも多数の機構を組み込み、要塞にも組み込まれているDICを完全なものにしたものまで組み込んである。

少し考えて、俺は向こうにこう言ってやった。

「その程度なら大した損失にはならない。そもそも、あれを理解するのは人間には不可能だからな。お前たちは今まで通り職務を全うすればいい」

それだけ言って、俺は秘匿回線の通信を切った。

「……篠ノ之束、か……」

そろそろ時間が無いなと本気で思った。

3 - 4 買い物編 下（後書き）

やっと買い物編が終わったー！長かったー！だるかったー！
というわけで、次回からようやく臨海学校です。

3・5（前書き）

小学校を卒業するぐらいまで海には人魚がたくさん住んでいて、海の底にはアトランタという人魚の国があるんだと本気で信じていました。

……海のトリトンの見過ぎですね。分かってます。

ちなみに、リトルマーメイドは一度も見たことはありません。これから見る予定はないです。

あれから少し経って臨海学校の当日、俺はバスの中で密かな希望と確かな絶望に向き合っていた。

俺は海に行ったことが無い。それもそのはずで、オーストリアは海に面していない国のため小さい頃から海に行く機会なんて無かった。

だからかは分からないが、俺は今心の中ではしゃいでいる。

「レイス、どうかしたの？」

「いや、別に」

……見た目は普段と全く変わらないが。

「いやー、やっぱり海を見るとテンション上がるなあ」

俺の隣では一夏が馬鹿みたいに騒いでいる。

席順としては、俺の隣（窓側）に一夏、通路を隔てた反対側の席にラウラとシャルロット、その前にオルコットと篠ノ之が座っている。

……今更だが、一つのクラスに専用機持ちが五人もいるという状況はおかしいと思う。

「一夏は海とか行ったことあるのか？」

「うん？ まあ、小学生の頃は箒とかとよく一緒に行ったし、中学

に入ってから弾とかと行ってたからな」

なるほど。一夏は結構泳ぐのは得意らしい。

「シャルロットたちは？」

「僕？ まあ、そこそこかな」

「軍人が泳ぎの一つや二つできなくてどうする」

「私も泳ぐのは得意ですわ」

「日本人として水泳くらいは出来なくては」

……全員普通に泳げるらしい。

「ところでお前はどうかのだ？ 水泳くらいは当然出来るのだろうか？」

何かに気付いたのかウラが嫌な笑みを浮かべながら、とても楽しそうに俺に聞き返してきた。

……その何かに勘付かれると、俺はとても困るんだが。

「で、どうなのだ？」

気付けばいつもの五人以外にもクラスの殆どが耳を傾けているという状況。だが、そこに助け舟を出してくれる人もいた。

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ」

織斑先生のその一言で全員が席に着く。流石は織斑先生だ。俺もあのくらいのカリスマ性が欲しい。

「で、結局どうなんだ？」

……俺の苦悩はまだまだ続きそうだ。

その後、バスから降りた俺たちは花月壮という旅館の前でその女将さんに挨拶していた。

規模的にはかなり大きく、IS学園の生徒が一学年丸々入ってもまだ空きがあるらしいのだが、なぜか一夏は織斑先生と同じ部屋で俺はノエルと同じ部屋になった。

そして花月壮、花の間。そこに俺とノエルはいた。

「一緒に部屋ですね殿下。殿下のお世話は、このノエルが責任をもつて全うしますので」

「ああ。期待して無い」

「もう！ 殿下は最近私に冷たいです！」

ノエルの言い分はさっさと無視して着替えを始める。今日は一日自由行動らしいから当然のように泳ぐ時間も与えられている。泳げるかどうかは別として、かなり楽しみだ。

制服を脱いでハンガーに掛け、ズボンは畳んで部屋の隅に置く――と、なぜかノエルが不満げな顔でこっちを見ていた。

「どうした？」

「もう！ 私が殿下のお世話をするって言ったばかりじゃないです

か！ 殿下はその辺に服を脱ぎ散らかしておけば、後は私がやっておきますから！」

「んなこと言われてもな……」

人に何かをやってもらうのって好きじゃないんだよな。基本的に自分のことは自分でやる事にしてるし、じゃないと人間駄目になるし。

というか、いずれは一国の主となるべき人間が他人に頼りきりつてどうなのよ、実際。俺の父上が今まさにそんな感じだが、俺はそうなるつもりは無い。

だが、このままだとノエルはかなり面倒な事をしでかす恐れがあるため、俺は話題を百八十度変えることにした。

「そんなことよりノエル、俺が渡した設計書は本国に送ったか？」

「あ、はい。ヴェント様も殿下に了解したと伝えて欲しいとおっしゃってました」

「そうか。それと、俺が日本に来てから今日までに送ったデータとプラン。あれはどうなってる？」

「はい。既に『ランド・デイズスター終焉を喰らう者』と『ジャッジメント・クロス断罪の十字架』の稼動テスト

は終了し、完成に至ってます。ただ、IS自体にプロテクトが掛かっていて、稼動試験以上のことを行えないのですが……」

「大丈夫だ。俺がそうなるように設計したからな。それと――」

俺は一旦言葉を切り、部屋の窓を開けて風を入れる。そして、

「今日の三時までには本国からISの特殊部隊、スピードを呼んで配

置させる。この旅館の中に少なくとも四人は配備するように」

「分かりました」

ノエルはそう言いつつ、音も無く部屋から出て行った。

俺はそれを見計らって自分のカバンの底に隠してあったノートパソコンを取り出し、自作のソフトウェアに実行パスワードを入力する。

（これで準備は整った）

心の中でそう呟いて、俺は海へと向かった。

3 - 5 (後書き)

断罪の十字架

レイスが制作した中・遠距離型の第五世代型IS。

エネルギー効率を重視した機体で、予備エネルギーパックを量子変換しておくことでいつでもシールドエネルギーの補填が可能。また、エネルギーを他のISに移すためのバイパスを構築する能力に特化しているため、紅椿ほどではないにしろ長時間の戦闘が可能。

要塞に装備されている紅の砲台に勝るとも劣らない大威力の超遠距離武器が存在し、形態次第では音速を超える超高速での戦闘から、攻撃能力に特化した戦闘、防御能力に特化した戦闘まで様々な状況に対応できる。

基本的に要塞と同じ防御型。

終焉を喰らう者

レイスが制作した近・中距離型の第五世代型IS。

殲滅力に特化した機体で、一对多数の戦闘でその能力を発揮する。断罪の十字架と同じくエネルギー効率に特化した機体だが、光と熱、気圧や重力を利用した永久機関を搭載しているため紅椿よりも遙かに長時間の戦闘が可能（操縦者の集中力と体力が持つ限り）。

エネルギーバイパスを構築する能力は無い。

殲滅力に特化した半面防御性能は低いが、唯一仕様能力を使った時には恐ろしいほどの力を発揮する。イメージ的には、小型の中性子爆弾が小刻みに爆発しているような感じ。

超高範囲に被害が及ぶ武装が一つある。

3 - 6 海（前書き）

最後ら辺、レースが狂います。

3 - 6 海

臨海学校。男の夢とロマンと熱情と劣情とその他いろいろなものが混ざり合って混沌とした状況の中に確かな夢と希望が満ち溢れるイベント、臨海学校。

俺は今までの人生の中で臨海学校というイベントには出会わなかった。それもそのはずで、オーストリアは海に面していないため、学校の行事で海に行くなんて夢のまた夢だった。

まあそんなことはどうでもよくて、俺がなにを言いたいかって言うと、

「わ、ミカつてば胸おつきー。また育ったんじゃないの？」

「きゃあっ！ も、揉まないでよう……」

「ティナってば水着大胆だね」

「そう？ アメリカじゃ普通だと思うけど」

最高ですか？ 最高です！

IS学園に通う女子は総じてレベルが高い。殆どの女子はかなりの美少女に加えてそこそこ良い体してるし、様々な国の人がいるから見ていて飽きない。

「あ、レイス君だ！」

「うわ、体すっごい締まってる。鍛えてるんだね」

「ね、ねえ静寝、私の水着、変じゃない？」

「んー？ 大丈夫だと思うけど」

「ねね、レイス君、後で一緒に遊ばない？」

「暇だつたらな」

今すぐではないにしろ、そのうち嫌でも用事が発生するだろうし。

「お、先に出てたのか」

軽くストレッチをしていると、俺の姿に気付いた一夏が変な歩き方で俺の方に寄ってきた。

「酔っ払いの真似か？」

「いや、砂が熱いから——あちちっ」

砂が熱い、ね。

そんなに熱いか？

「お前は熱くないのか？」

「だいぶ前にラウラにやらされた拷問まがいの訓練に比べたら全然だな」

あれは十日ぐらい前。いつものように訓練をしていると唐突にラウラが現れ、「私がドイツにいた頃にやっていた訓練をやってみるか？」と聞かれたため、言われるままにIS学園の地下訓練施設に行った時の出来事だ。

金網のようなものの上に立ってその上を歩く。ただそれだけの訓練だった。

だが、その内容は常軌を逸していた。

下には轟々と燃え盛る炎があり、足を踏み外したら一巻の終わり。しかも、熱のせいで金網はかなりの温度に熱せられ、その上を落ちないようにして歩くと言うバランスを鍛えるための訓練だった。

ラウラは何でもないようにやっていたが、後でラウラの足の裏を見ると盛大に火傷していたため、少しばかり叱った。

「今度お前もやってみるか？ 本気で三途の川が見られるぞ」
「い、いや、いい。遠慮しとく」

なんだ、面白い絵が見られると思ったのに。

「い、ち、か~~~~っ！」
「おうわっ！」

そんなやり取りをしていると、一夏の体に鳳が抱きついた。

「あんたこんなとこで何もたましてんのよ。さっさと行くわよ！」
「ちよ、鈴、降りろって」
「んじゃ、俺はもう行くから」
「レイス！ 俺を見捨てんなよ！」

一夏が何か言ってるが、俺はそれを軽くスルー。相手にしてられつかあんなリア充の。

なんとなく手持無沙汰になって浜辺をぶらつく。周囲の女子は俺が近くを通るたびに手を振ってきたりとなかなか忙しいが、俺は何を思うでもなく、愛想笑いを浮かべて手を振り返すだけだ。

(……おかしいな。普段の俺だったら絶対に興奮するシチュエーシ

ヨンなのに……)

まさか、この世に生を受けてからたったの十五年で悟りを開いてしまったのだろうか。それは物凄く困る。前にノエルに言われたことじゃないけど、物凄く老けてる感じに見られてしまう。

「あ、レイス！」

そんなどうでもいいことを考えていると、後ろのほうからシャルロットの声が聞こえた。俺はその声に反応してゆっくりと振り向くと、全体的に黄色を基調とした色合いのビキニ姿のシャルロットがそこに立っていた。

腰にはパレオを巻いているためヒップのラインはあまり見えないが、女の子らしい健康的な肉付きと、太陽の光にあたって黄金色に輝く手入れの行き届いた綺麗な髪、Cカップぐらいはありそうなほどに丸みを帯びた胸が寄せてあげるタイプのビキニでさらに強調されて——イイ。

まじまじと見てみると、俺の視線がどこに向かっているのかようやく気付いたのか、

「あ、ど、どうかな？」

と、顔を赤らめて聞いてきた。その顔、なんっつか——

「めっちゃ可愛い！」

「ほ、本当！？」

いやあ、何でか知らないけどシャルロットといるとなんかテンシ

ヨン上がんなあ。

——にしても、こうやって見るとやっぱり小さいな、シャルロットは。たしか154センチだっけ。てことは、俺よりも30センチ近く小さいことになるのか。

「いつまでもシャルロットばかり見ていないで、少しは私のほうを見たらどうなのだ？」

そう声がしたかと思うと、いきなり後ろ髪を下に引っ張られた。今の声は——ラウラか。

そこにいたのは——

「どうだ、お前の趣味に合わせてやったぞ」

旧型スクール水着に身を包んだラウラの姿だった。

——（思考停止）

「ら、ラウラ！」

「うむ？ そんなに慌ててどうしたんだシャルロット」

「どうしたじゃないよ！ 買ってきた水着はどこにやったの！？」

「一応下に着ているが——おい、まてシャルロット！ 脱がそうとするな！」

——。

——神よ。生まれて初めて、あなたに感謝します。

スク水最高おおおおおおおおおおっ！！！！（自分でも

頭がおかしくなり始めたというのは分かってるがあふれるこの激情を抑えきれない)

「つて、ええ!？ レイス、ちょ、大丈夫!？」

「大丈夫に決まってるだろ」

「今の『』は何!？ つていうか、レイス鼻血凄いだけど!？」

ああ、幸せすぎて血管まで切れちゃったか。

まあ、いいや。

「は、恥ずかしかったがお前のためにとまって着たんだが……ど、どうだった？」

「正直ラウラのことが一瞬天使に見えた」

だって、シャルロットは競泳用水着着てくれなかったしなー。

よし、今度ラウラと一緒に買い物に行つて、ラウラの服を俺の好きなようにコーディネートしてやろう。よし、今年の夏の指針決まった。

3 - 6 海（後書き）

今後の展開の重大発表します。

現在立っているフラグと今後の展開を考えた結果、最終的にシャルロットとラウラのルート、どっちに行くかが決定しました。

タグからも分かると思いますが、今後の展開は相当血生臭いストーリーになる予定です。

今後の更新をお楽しみに。

では（ - - ）ジッ

終焉への系譜（前書き）

次章予告みたいなものです。次から本格的に戦争パートへと移行します。

終焉への系譜

「『断罪の十字架』と『終焉を喰らう者』。お前たちを未来へと導くための翼だ」

「こんな方法で、お前は一体何を救うつもりなんだ！」

「一夏．．．．．私は．．．．．お前のことが好きだ．．．．．」

「私はこいつに付いて行くと決めた！ それを邪魔するなら、相手が誰でも容赦はしない！」

「レイス．．．．．僕たち、どこで間違っちゃったのかな？」

「俺の仲間は、誰一人傷つけさせねえ！」

「安っぽい正義感で救えるほど、この世界は甘くないんだよ！」

「どうしようもない弟だがな、一度決めたこと最後までやり遂げる強い意志を持っているぞ」

「はしゃぐなゴミども。王の御前にあらせられるぞ」

「このノエル、殿下のためにいつでも死ぬ覚悟は出来ております！」

「結局、僕じゃ駄目だったってことだね．．．．．」

「私が友であり強敵だと認めた女は、どんなことにも揺るがない強

「意志を持った女だった」

「ーそして俺は、神をも敵に回す。」

終焉への系譜（後書き）

次は少し長めに行きます。

それと、次回いきなり登場人物の数が増えます。多分2人か3人くらい。

第一部 神速のヴェント（前書き）

新章です。

それと、前回の予告通り新キャラが2人来ます。1人はみなさんご存知の生徒会長様です。

第一部 神速のヴェント

それから六時間ほど経って時刻は夜の七時半。

レイスたちは大広間を三つ繋げた部屋で、懐石料理に舌鼓を打っていた。

この旅館のしきたりとして食事中は浴衣を着用しなくてはならな
いらしく、レイスたちは全員浴衣を着用している。だが、そこに
いる殆ど全員が、「普通は浴衣の着用を禁止するんじゃないのか……
？」と、ふと疑問を抱いていた。

「しかし、日本人はよく生身の魚なんて食えるよな。オーストリア
じゃ有り得ない光景だ」

レイスは目の前に造られた刺身を一切れ摘まんでそう言う。刺身
が嫌いなわけではないが、周りにいるレイスと同じヨーロッパ出身
の生徒からすると、やはり日本の食文化とは根本的に違うものを感じ
ていた。

「でもレイスって基本的に何でも食うよな？」

そんなレイスの様子に気付いたのか、レイスの右前に座っていた
一夏が刺身に山葵わさびを塗りたくりながらそう言う。ちなみに席順は、
レイスの両隣にラウラとシャルロット、一夏の両隣にセシリアと箒、
鈴はクラスが違ったため、一組の座っている場所から少し離れた場所
で同じクラスの女子と談笑していた。

「俺はラウラと同じで軍事訓練とか結構受けてるからな。生の食物

とか虫程度なら普通に食えるぞ」

「同感だ。戦場では食糧不足になることなどザラにあるからな。そういう時にこそ何でも食べられる強靱な胃袋と精神が必要になるのだ」

「ラウラ、今度一緒に軍事訓練するか。内容はサバイバルナイフを片手に密林を踏破。三日間、物資の支給も何もなしで救助のへりを待つ訓練だ」

「いいだろう。密林というと、やはり南アメリカあたりか」

「ちよつと待ったー！」

ラウラとレイスが楽しそうに話していると（内容は高校生のものだとはとも思えないが）、場の空気がおかしな方向に向かっていくのを感じ取った一夏が二人の間に割って入った。

「一夏、食事中は静かにしろ」

「無作法な奴だ。食事中に出歩くなという幼稚園児程度の知識も無いのか」

「いや、俺とお前等どっちが正しいかって言ったら間違いなく俺のほうがと思うぞ」

まるで「おかしいのはお前だ」と言わんばかりの顔で一夏を見ているレイスとラウラに一夏はジト目を向ける。

だが、ラウラはもとよりレイスまでもがそれを完全に無視した。もとい、黙殺した。

レイスは再び視線を目の前の刺身に落とす。だが、彼の意識はすでに目の前の食事には向けられていなかった。

レイスが見ているのは自分の周囲。特におかしな様子は見当たらず

ないが、その認識自体が間違っていることに彼は気付いていた。

(……意外と早かったな)

レイスの視線の先。そこには、周囲の人間に溶け込んで食事を取っている三人の女生徒と、旅館の従業員の姿をしている一人の女性
がいた。

彼女らは周囲に何も違和感を与えることなくその空気に馴染んでいる。彼女らと話をしている生徒も、最初から彼女たちが自分たちの友人であるかのように楽しそうに会話をしている。

「……まったく、平和な光景だな」

「ん？　なんか言ったか？」

すでに刺身を食べ終わり、茶碗蒸しを食べ始めた一夏がレイスの
呟きに反応する。だが、レイスは平常を装い、

「いや、独り言」

そう言って誤魔化した。

(まだ他の奴らに計画を知られるわけにはいかない。余計な混乱を
招くような事態は、出来る限り避けないといけないからな)

レイスはそう思いながら一夏の隣に座る、和風美人といった出で
立ちの筈に目を向ける。だが、その視線を気取られぬうちにレイス
は視線を逸らした。

「なあ一夏、ちょっといいか？」

「うん？」

「いきなりこんなこと言うのもどうかと思うんだけどさ、お前好きな女子とかいるのか？」

その瞬間、大広間にいた女子の殆どが一瞬にして臨戦態勢になったのが感じ取れた。例によって鈍感王の一夏はそんな周囲の様子になど一切気付いていなかった。

「おまつ、いきなり何を」

「悪いけどこれはお遊びとかで聞いているわけじゃないんだ」

レイスは真に迫った表情で一夏にそう問いかける。あれほど騒がしかった女子たちも、水を打ったように静まり返り、室内には異様なほどの空気が流れている。

「好きな女子……っていうか、気になってる奴らならいるよ」

「……そっか」

それだけ聞いて、レイスは不意に席を立った。

「レイス？」

「眠くなつたから今日は寝る。おやすみ」

廊下へと繋がる襖に手を掛けてゆっくりと横にスライドさせる。

だが、何かを言い残したのかレイスは大広間の外に出ず、振り返らずにたった一言、

「……明日は7月7日だ」

そう言い残し、レイスは那场から姿を消した。

レイスの言い残した一言の本当の意味が分かった者は、その場には誰一人として存在しなかった。

部屋に戻ったレイスは、明かりも点けずに三日月が煌々としている夜空に目を向ける。その表情はどこか虚ろで、いつもの彼の表情ではないことに、レイス自身気がついていた。

(……明日になれば全てが終わる。この世界を包んでいる、狂った制度も、何もかもが)

そう考えながら、彼は真つ暗な部屋の中で唯一明かりを放つノートパソコンの画面に目を向ける。そこには、レイスが開発、制作までを殆ど一人で行った二つのIS、『断罪の十字架』^{ジャッジメント・クロス}と『終焉を喰らう者』^{ランド・デイズター}のグラフィックが回転していた。

白銀に輝く装甲と、機体の両側面に分厚い壁のようにして鎮座する二つの巨大な十字架が特徴的な『断罪の十字架』。

重厚で圧倒的な黒を見せつけ、触れるもの全てを微塵に切り刻むような圧倒的存在感を放つ『終焉を喰らう者』。

それぞれが担うのは、全てを拒み、輪廻を断ち切る『断罪』と、全てを飲み込み、永遠をも破壊する『終焉』。

それこそが、世界を救うための鍵だった。

（俺に残された時間は少ない。いや、俺だけじゃなく、この世界に残された時間が――）

そこまで思ったとき、レイスの意識が一瞬にして切り替わった。

つい先程までレイスしかいなかったはずのその部屋に、気配もなく三人の女性が居座っていた。

一人はレイスのメイドであり、オーストリアの代表候補生であるノエル・リーフェンリス。彼女はもともと彼と同室であるため、彼女がそこにいるのは何も不思議なことではない。

彼女自身も、部屋に入ってきたときにレイスが考え事をしているのを見つけ、邪魔にならないように部屋の隅で明かりも点けずに正座しているだけだった。

だが、他の二人は違う。

一人はレイスと同じ、腰まで届くほどに長い、蒼い髪とライトグリーン

の瞳を持った綺麗な女性だった。
歳はレイスよりも一回り上。二十三、四くらいの歳のようで、月明かりに映るその姿は、まるで異世界から連れてきた人のような、絶世の美貌と雰囲気

を辺りに振りまいていた。
切れ長なその瞳は両方閉じられていて、傍から見れば壁に体を預けたまま眠っているように見える。だが、その立ち姿に隙は一切なく、戦場で常に危機に晒されているかのような錯覚を覚えさせられる。

「……入ってきたなら一言声をかけてください、姉上」
「……………」

『姉上』というレイスの言葉からも分かるとおり、彼女はオーストリア第一王女で王位継承権第二位の、ヴェント・A・ファルクフェルトその人だ。

ISの国際大会、モンド・グロッソにおいて第一回大会、第二回大会と連続で出場したオーストリアの元国家代表IS操縦者で、その両方を射撃部門で最優秀賞を取った逸材であり、前大会では織斑千冬の棄権により戦いはしなかったものの、名実共に世界最強になった人である。

そして、シャルロットラビント・スイッチ以上に高速切替を得意とし、唯一の近距離武器である刺突剣から繰り出される神速の突き。その二つから付けられた二つ名が、「神速のヴェント」だ。

だが、彼女は生まれたときから喉に障害を抱えており、普通に話すことが不可能な体なのだが、

『それは悪かった。なにやら思い悩んでいたようだったのだな』

そう、その場にいた全員の頭の中に声が響いてきた。

彼女は普通に話すことが出来ない。それを不憫に思ったレイスが小学生の頃に開発した、「思ったことを空気に伝え、空振動で鼓膜を揺らして思いを伝える機械」によって普通に意思疎通ができるようになったている。

それと同様に、「目が見えなくともカメラで見た景色が首筋の延

髓から電気信号になって頭の中に流れ、目が見えなくとも見えているのと同じように感じる事が出来る機械」や、「耳が聞こえなくとも高感度集音マイクによって拾った音が電気信号になって脳の聴覚神経に作用し、耳が聞こえているのと変わらずに日常生活を送ることが出来る機械」といった、特許を申請して売り出せばいくらでも儲けられるものを大量に生産してきた。

それはともかくとして、この場にいるもう一人の女性。肩口辺りまで伸ばされた髪と、開かれずに口元に押し当てられている扇子。本来ならばこの場にいるはずの無い女性が、そこにひっそりと佇んでいた。

「……なんであんたがここにいる」

「あら、私がここにいたらいけないのかしら？」

質問を質問で返されたレイスは内心不機嫌になる。だが、その感情を気取られないようにするために小さく息を吐き、そこにいるIS学園の女子、更識楯無へと目を向けた。

IS学園に通う生徒だったら知らない生徒はいない。圧倒的な力リスマ性を持ち、文武両道、才色兼備というとんでもない女。IS学園において最強の証明である「生徒会長」の座に着き、学園においてただ一人自由国籍権を持ったロシアの国家代表IS操縦者。

「その生徒会長さんが、俺に何の用だ？」

「ねえレイス君、その前に一ついいかしら？」

「……勝手にしろ」

早くも何を言っても無駄だと感じ取ったのか、レイスは自分の質問を打ち切る。こういう相手には先に好き放題やらせたほうが後が

楽になるという経験からだが、その事を知っている人間はこの場にはいない。

「キミは、一体何をしようとしているの？」

「……話が読めないな」

そう言っただけ、レイスは再び窓の外を見る。

外では波の音と、鈴虫の鳴く声が響き渡っている。林の中ではセミも活動を中断している頃だろう。

「……そう。でもね、一つ忠告しておいてあげる」

楯無はそう言っただけ、扇子を開く。そこには、達筆な文字でなぜか「一刀両断」と書かれている。

「私はこれでも一応学園の長、生徒会長なの。だから、学園の生徒を傷つけるような真似をすれば、私はキミのことを敵と見なすわ」

「職務に忠実で苦勞様。それで、話は終わりか？」

「ええ。私がここに来た本当の目的は、妹に忘れ物を届けに来たことだから」

そう言い残し、楯無は部屋の外に出る。

再び部屋が静寂に包まれ、時折部屋の外から賑やかな声が聞こえてくる。

「……レイス。本当に、これでいいのか？ 私にはもう少しやり方があると思うのだが……」

「私もそう思います。それに、こんなやり方、いつもの殿下らしく

ないです……」

ヴェントとノエルが口々にそう言うが、レイスは月明かりの空を見続ける。

（……俺だって、時間があつたら別の方法を考えてる。……けど、世界に残された時間は、もう一週間しかないんだ）

レイスはそれを思い出したように、きつく目をつぶった。

第一部 神速のヴェント（後書き）

次回は遂にあの天災がやって来ます。

次回、「ISの真実」。

楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6806t/>

IS ～ 難攻不落の要塞 ～

2011年11月13日19時28分発行